

Fate/curious tale 緑の勇者と白い魔王

天々

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本、風宮市――

そこで行われる亜種聖杯戦争に召喚されたのは勇者と呼ばれたサーヴァント、キャスターと魔王と呼ばれたサーヴァント、アーチャー。

二人の邂逅はこの聖杯戦争に何を齎すのか。
今はまだ知る者はいない。

※この作品はオリ主、オリキャラ、オリ鯖(ゲームなどからの出典)による割りと何でもありのオリジナル聖杯戦争です。

初めての長編小説なので色々おかしくなるかもしれませんが、温かく見守って頂ければ幸いです。

目次

一章 聖杯戦争開幕

一話	勇者	1
二話	魔王	6
三話	狂戦士	14
四話	少年	20
五話	桃色	27
六話	騎士	29
七話	剣と…	32
一章終了時点ステータス表（ネタバレ？）		35

小ネタ集

53

二章

一話	魔術師	56
二話	聖杯戦争	63
三話	決意、そして同盟締結	66
四話	メイドがいた	71
五話	彼女の名は	73
六話	魔王と呼ばれたもの	76
七話	初戦を終えて	80
八話	凶報	84
九話	訪問と確認	86
十話	招集	90
十一話	棚ぼた同盟	93
十二話	騎兵捕捉	97
十三話	騎兵激突	99

十四話 空中戦の行方

十五話 目標発見

102

104

一章 聖杯戦争開幕

一話 勇者

小野正裕は魔術師としては傍流である。

彼の父は魔術刻印を継ぐことはできず、その兄が継いだからだ。

そして、正裕もまた刻印を継ぐことはできなかった。

彼にも兄がおり兄がすべてを継ぐことが決まっていたから。

傍流の、そのまた傍流。

それが小野正裕という魔術師であり、彼のコンプレックスであった。

日本の風宮市において行われる聖杯戦争の話を知ったとき、正裕はそれを自分の名を上げるチャンスだと考えた。

聖杯戦争とは願いを叶える聖杯と呼ばれる呪具を生み出すための魔術儀式であり、そしてそれを奪い合う魔術師同士の殺し合いである。

それを勝ち抜き、聖杯を勝ち取ることは己という魔術師の存在を世界に示す何よりの名誉となる。

彼は参加を決めると、すぐさま準備に取りかかった。

過去の聖杯戦争の情報をかき集め、必要な薬品や触媒などを調達する。

父に聖杯戦争への参加を告げると父は快く協力を申し出てくれた。

用意した品々の一部は父が家の蔵から供出してくれたものであるし、かつて使っていたという礼装も譲ってくれたのだった。

父にしてみれば後継者を選ばなかった息子へのせめてもの援助と後継者を選ばれなかった者同士としての同情の念もあったのだろう。

思わぬ助けを得た正裕は準備を万端に整え、聖杯戦争が行われる地へと向かったのだった。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至

る三叉路は循環せよ」

本来ならば魔術師であってもその様な存在は召喚も使役もできない。

聖杯と呼ばれる超常の呪具なくしては叶わぬ奇跡なのだ。

そしてその聖杯は聖杯戦争を制した者のみが手にすることができ、持ち主の願いを叶えると言う。

聖杯戦争とはサーヴァントの主であるマスター達とサーヴァント達七組による、聖杯争奪戦なのである。

正裕は目の前のサーヴァントを見て固唾を飲んだ。

少し見ただけでわかる圧倒的な魔力と存在感。

それは、魔術師として神秘に親しんできた正裕ですら畏怖を覚えるものであった。

「そうだ」

内心気圧されながらも正裕がうろたええること無く返答できたのは、事前の下調べがあつてこそだ。

もしも大した下調べも無く召喚に望んでいたら惨めにも狼狽し、腰を抜かしていたかもしれない。

「これがその証だ」

そう言うとき正裕は袖をまくり、右腕に刻まれた紋様をさらした。

赤く鈍く輝く紋様は令呪と呼ばれるものだ。

聖杯戦争に参加するマスターに与えられるものであり、これがなければサーヴァントの使役はできない。

「確かに拝見いたしました。サーヴァントキヤスター、これよりマスターの杖・マスターの剣としてあなたを勝利に導きましょう」

そう言って跪くサーヴァント、キヤスターを眺めながら彼はたった今浮かんだ疑問を口にした。

「キヤスター？セイバーとかじゃなくて？」

そう、確かに彼はキヤスターと名乗った。

英霊という規格外の存在をそのままの形で使役することはできない。

故にサーヴァントは召喚された際に七つのクラスのどれかに当てはめられ、そのクラスに沿う形に格を落として召喚されるのだ。

七つのクラス。

全体的に高い能力と対魔力を誇る剣士のクラス、セイバー。

高い敏捷性を誇る槍兵のクラス、ランサー。

遠距離攻撃を得意とする射手のクラスアーチャー。

騎乗を得意とし、乗騎や乗り物を駆って戦う騎手のクラス、ライダー。

魔術を得意とする魔術師のクラス、キャスター。

闇に潜み、暗殺を得意とする暗殺者のクラス、アサシン。

そして理性と引き換えに高い戦闘力を持って召喚される狂戦士のクラス、バーサーカー。

とくにセイバー、アーチャー、ランサーのクラスは三騎士と呼ばれ、優秀な能力やスキルが揃っているクラスとして有名である。

正裕はこの中からセイバーのクラスのサーヴァントを喚ぶつもりだった。

英霊を喚ぶ際には英霊に縁のある品を触媒として用いることで狙った英霊を呼び出せる。

今回、正裕が用意したのはある国で剣士として名を馳せた勇者に縁のある触媒であった。

召喚されるとしたらセイバーか、もしくは弓の名手でもあったためにアーチャーのクラスで召喚されると予想していた。

どちらにしろ三騎士のクラスで呼び出せると考えたのだが……
「生前は魔法の品を多く使ったからね」

キャスターの返答を聞いて正裕は得心した。

確かにかの英雄が主に使用したのは剣であるが、それ以外にも非常に多彩な武器を用いている。

そのなかには魔法の杖なんて言うものもあった。

「その背中の剣は？」

キャスターはその背に剣を背負っていた。

サーヴァントはクラスにそぐわない武器は再現されないものであるらしい。

ならば、セイバーではない以上剣は持っていないはずなのだが……

「ああ、なるほどこれか。生前はこれを魔術を使うときにも使ってたからじゃないかな?」

「なるほど」

そう言っただけながら正裕は内心で「ほっ」と胸を撫で下ろしていた。

かの英雄が用いた物で最も格の高いものは彼の使用した聖剣である。

背負った鞘の中身を十全に扱えるのならばそれは大きな戦力になるだろう。

「ところで、真名は——でいいのか?」

自分が用意した触媒に縁のある英雄の名前を告げる。

伝承通りの出で立ちや風貌から確信はしているが、確認のためである。

「そうだ、僕は——。この名に懸けてあなたに聖杯を捧げよう」

キャスターは頷くと、正裕の瞳を見つめて力強く宣言した。

こうして彼らの聖杯戦争は始まった。

二話 魔王

夜の住宅街を白山美奈（しらやまみな）は走る。息を切らせ身に纏う衣服の乱れも気に止めず、止まりそうになる両脚を酷使しながら。彼女を追うのは異形の怪物である。血走った紅い瞳、月光を浴びてらてらと光る鱗の生えた肌。

それが爬虫類然とした見た目であるのならバリアードマンと呼ぶのにふさわしいだろう。

しかしそのシルエットは人間のそれであり、にも関わらず手足を地面について四つ足で迫り来るのであった。

（どうして、どうして……）

助けは呼んだのだ、悲鳴はあげたのだ。

しかし周りからの反応はなく、助けは来ない。そもそも家の電気は一軒残らず消えていて、人気と言うものがない。時間はまだ夜の八時ほどだというのに。

（助けて、誰か助けて）

走りながら彼女は必死に願う。自分を助けてくれる存在を、この悪夢のような状況から自分を救ってくれる何かを。

しかしそんな存在は現れること無く、逃走劇は終わりを告げた。

「きゃあああ」

酷使した脚に限界が訪れ、彼女は前のめりに転んだ。

地面に打ち付けられた体は盛大に痛めつけられ、立ち上がる気力と体力を根こそぎ奪われる。

「う……、ぐう……」

それでも後ろを確認するべく、痛みをこらえながら仰向けに体をひっくり返した美奈の瞳には――

絶望が、映っていた。

獲物を前にして狂喜に輝くふたつの眼。口蓋から溢れ出る長く伸びた舌。肉食獣の如く尖った牙。ペタペタと足音をたてながら迫る異形の怪物。

「あ……、あ……」

今から自分は食べられる。抵抗むなしくこれに捕食される。その確信と恐怖に彼女は言葉にならぬ声を漏らす。

その様子を眺め、怪物はにたにたと笑っていた。

「誰か……誰か……」

救いを求める。

「神様仏様神様仏様神様仏様……」

助けを求める言葉を震えた口で呟きながら彼女は考える。

(もし自分を救ってくれるなら——)

例え悪魔でも、魔王でも構わない。

そう念じたとき変化は訪れた。

彼女の目の前、化け物との間に立ちはだかるかのように突風が渦巻き、まばゆい輝きが迸る。

そのあまりの勢いに彼女は後ろに吹き飛ばされた。

風と光は十秒ほど荒れ狂った後、ゆっくりと勢いを失い収まっていた。

「な、何……?」

吹き飛ばされたあと、どうにか顔をあげた彼女が見たものは白いコートを羽織った銀髪の青年の背中だった。

彼は美奈に振り返ることも無く手にしたナイフを一閃させると、異形の化け物を縦一文字に切り裂いた。

「うぎょおおおおおお」

奇怪な断末魔をあげて怪物が地面に沈むと、それはゆっくりと美奈へと振り向いた。

「はじめまして、俺はアーチャーのサーヴァントだ。貴女が俺を呼んだマスターか?」

微笑みながら尋ねる青年を前にして、白山美奈は意識を手放した。

それが、魔王と呼ばれた彼と白山美奈のはじめての出会いであった。

「んっ」

美奈は自室のベッドでぼんやりと目を覚ました。

服は普段着のままであり、着替えずに寝たせいか妙に汗臭い。

外は暗くなっており、あわてて携帯電話で時間を確認しようとしたが見当たらない。

昨日はどこに置いたものか、と思い返そうとした所で彼女はようやく昨夜の奇怪な出来事を思い出した。

「ようやく起きたのかマスター」

「うわあっ!？」

室内に突然響いた声に、美奈は驚き、悲鳴を上げる。慌てて室内を見渡すとそこには昨晚美奈を助けた青年が壁を背にして立っていた。そんな彼女を見て青年は片手を顔の辺りに持ち上げて軽く頭を下げ申し訳なきように詫びた。

「驚かせてごめん。それで昨日はちゃんと確認が取れなかったんだけど、貴女が俺を呼び出したマスターってことでもいいのかな？」

「ますたー? 私が貴方の?」

美奈には青年の質問が理解できなかった。

呼び出したとはいふものの彼女には青年との面識は無かったし、ますたー、これは多分masterつまりご主人様のことであろう、何て言うものになった覚えはない。

「えーと、もしかして」

あからさまに戸惑う美奈を見て、青年はバツが悪そうに頬を掻いて尋ねた。

「聖杯戦争って知らないか？」

「何それ」

間髪入れずに返した美奈の返答に、青年はがっくりと肩を落とした。

「嘘だろ……」

「えつと……」

青年のあまりの落胆ぶりに美奈は何か申し訳ないような気持ちになる。もともと美奈自身が悪いわけでは無いのだが。

「じゃあ貴女は魔術師だったりするのかわか？」

「残念だけど……」

残念ながら美奈は一般人であった。

「うーん……」

今度の回答も期待に添えるものではなかったらしく、青年はいよいよ頭を抱え始めた。

「うん、分かったマスター、まずは落ち着いて聞いてほしい」

(落ち着いてないのは貴方でしょう)

宥めるように掌を前に押し出しながら言う青年の言葉に美奈は心の中で突っ込んだ。口に出したら可愛そうだと思ったのである。

「まず君が巻き込まれたのは聖杯戦争という魔術師の戦いだ」

「は？」

青年の言葉を美奈はよく理解できなかった。

「えーっと、ちよつと待って」

俯いて目頭を抑えながら、美奈は青年の言葉を制止する。

「魔術師って本当に？」

「ああ」

美奈の疑問を、青年は事も無げに肯定した。まるでそれが常識で当然のことであるかのように。

「いやいやいやいや」

「じゃあ、あの怪物はどう説明するんだ？」

「うっ」

美奈の否定の言葉は、しかし青年の指摘によって呻きと共に押し込められた。

昨夜彼女を襲った異形の怪物、その存在を彼女は説明できないが故に。

「魔術っていうのは存在する。昔の俺も信じられなかったんだけどね」

「そう、何でしょうね」

少し懐かしそうに言う青年の言葉に、美奈は同意で返した。まだ納得はしていなかったが。

「話を戻すよ。君が巻き込まれたのは聖杯戦争。魔術師達による聖杯を巡る殺し合いだ」

「ころっ!？」

「殺し合いだ」

驚きに目を丸くする美奈へ、青年は念を押すように同じ言葉を二度繰り返す。

「聖杯っていうのはなんでも願いを叶えてくれる道具のことさ。そしてこの聖杯戦争の特別な点として、魔術師達は1人につき一体ずつ、サーヴァントと呼ばれる使い魔を召喚して使役する事だ」

「サー、ヴァント…?」

「そう、サーヴァントだ」

恐る恐る尋ねる美奈へ、青年は頷きと共に言葉を返した。

「サーヴァントって言うのはかつて英雄であったもの達の事だ。生前様々な偉業を打ちたたてた者たちは英霊として祀り上げられる。そういったかつての英雄たちを召喚し、殺し合うのが聖杯戦争だ」

青年の言葉を美奈はあ然としながら聞いていた。

「さっき俺が言ったマスターっていうのはサーヴァントを使役する魔術師の事さ。そしてそれは聖杯戦争の参加者と言うことでもある。つまり：殺し合いの当事者だ。そしてそれは、俺というサーヴァントを召喚した貴女のことでもある」

冷淡に告げられた最後の言葉に美奈は困惑を禁じ得なかった。

（私が…? 殺し合いの当事者…? 何で…? そもそも私が魔術師ってこと…）

そこまで考えて、美奈はハッと顔を上げた。

「待ってよ！私は魔術師なんかじゃない！だからマスター何てそんなのなる訳がないでしょう!？」

必死に、青年に縋りつきながら叫ぶ彼女の言葉を、青年は首を振って遮った。

「残念だけど貴女はマスターだ。魔力が貴女から流れてくるのを感じるし、あの場で俺を呼び出したのは貴女以外には考えられない。貴女は確かに魔術師じゃない…魔術師じゃなかったのかも知れないけど、危機的状況で才能が開花する魔術師はいないわけじゃないしね」

「そんな…」

青年から手を放し美奈はへなへなと床にへたり込む。

青年はそんな彼女の姿を見つめながらしばらくの間無言で何かを考え込み、やがて何かを決意したかのように頷いて告げた。

「ひとつだけ、方法が無くもない」

与えられた救いの言葉に、美奈はぱつと顔を上げた。

「本当に!？」

青年を問いただすその顔は喜びを越えて狂喜に染まっていた。その顔を見て、青年は覚悟を決めたかのようにゆっくりと解決策を述べた。

「ああ、俺を殺せばいい」

「え……？」

その、解決策のあまりの突拍子の無さと残酷さに彼女はポカンとどろしなく口を開いたまま硬直していた。

「言っただろ。俺というサーヴァントを召喚したマスターだから貴女は聖杯戦争の参加者なんだって。なら話は簡単だ。俺がいなければ貴女はマスターじゃなくなるんだから」

「でもそれでああなたは良いの?」

震えながら尋ねる美奈の言葉を青年はこくりと頷いて肯定した。

「サーヴァントって言うのは結局一度死んだ人間だからね、本来の形に戻るだけ……?!」

そこまで言っつて、青年は驚愕の表情と共にあさつての方向に振り向いた。美奈の住むワンルームマンションの、入り口のある方向へと。

「どうしたの……？」

「敵だ……たぶん昨日のやつ仲間だ……」

怪訝そうに尋ねる美奈へ青年は真剣な面持ちで答える。

「昨日のつて……」

昨晚追いかけられた怪物の姿を思い出して、美奈は震え上がる。

「この気配だとサーヴァントもいるはずだ、ここじゃまずいな……。逃げるよマスター!」

「え、ちよつ……!」

そう言うやいなや青年は美奈を肩に担ぐと、部屋の窓をガラリと開

けてベランダへと飛び出した。美奈の抗議の声はスルーして。

「飛ぶよ。落ちないように気を付けて」

「え、飛ぶってココ2階…きやつ」

美奈の言葉は相変わらず無視して、青年はベランダから飛び出した。二階にあるベランダから。

青年は美奈を抱えたまま対面にある家の屋根へと跳躍、着地するとそのまま次々に家々の屋根を飛び移っていった。

「え、ちよ、え、え、え〜〜?」

浮遊感、人間離れた速度、後ろ向きに抱えられたが故に後ろから前へと流れていく景色。それらに翻弄され困惑したまま美奈は青年に担がれていく。

そのまま跳躍を繰り返した末に青年が辿り着いたのは、家から少し離れたところにある小さな公園であった。

「よし、ここなら大丈夫そうだ」

公園の中央に着地して美奈を降ろすと、青年はいま自分たちが来た方向へ振り向いて言った。

「付いて来てるんだろ? 思う存分やり合おうじゃないか」

返事はなく、ただ夜闇に言葉は消え行くのみである。誰もいないじゃないか、と美奈が青年に抗議しようと思った矢先、それは闇から染み出すように姿を表した。

現れたのは一人の屈強な男であった。

筋骨隆々とした巨体、きらびやかな装飾を施された宝剣と盾。毛皮で縁取りされた赤い——目出しのされたマントを頭から被り、下はビキニパンツ一丁。

その姿はまごうことなき変態であった。

「あれ、サーヴァントなのよね…?」

「あ、ああそうみたい、だけど…」

それを見た二人はドン引きであった。

「ああいうのが英雄なの…?」

「このような変態と一緒にされるのは誠に遺憾である」

「あ、ごめんなさい…」

思わず漏れた感想に対する青年の抗議に、美奈は素直に謝罪した。あんな変態と一緒にされるのは誰だって嫌であろう。

「ぐひやははははははは」

そのやり取りに怒ったのかどうか、目の前の男は狂声を上げながら剣を振りかざして美奈達に襲い掛かってくる。

「マスターは下がってて」

青年は美奈を庇う様に出ると、どこからか取り出したナイフを手に男へ向けて駆け出した。

三話 狂戦士

「どうする？・マスター」

正裕がキャスターの視界を水晶玉に投影して眺めていると、現地にいるキャスターが念話で尋ねてきた。

水晶玉に映っているのは、サーヴァント同士の戦闘である。どちらもクラスは不明。片や白いコートを羽織った銀髪の青年、もう一人は赤いマントを頭から被ったパンツ一丁の変態である。青年のサーヴァントの方はマスターを連れてくるようで、後ろにいる女性を守るように戦っている。

街にばら撒いていた使い魔によりサーヴァント戦を察知した正裕は、その場にキャスターを派遣した。いつでも戦闘に介入できるようにである。

「どうする、とは？」

「あの子は助けられないの？見た感じ魔術も知らない素人だし」

「素人？」

キャスターの報告を受けて、正裕はより深くキャスターと意識を同調させた。

サーヴァントとマスターは霊的な繋がりがあり、感覚の同調が可能である。水晶玉に視界を映し出しているのもその応用であった。

正裕はキャスターの感覚に同調させて女性を眺めたが、魔術師と言うにはあまりに軽微な魔力しか感じ取れなかった。これでは一般人に毛が生えた程度でしかない。ましてや今はサーヴァント戦の最中であり、普通ならサーヴァントを支援するなり身を守るなりするための魔術の準備はしていないとおかしいのだ。

「なるほど、素人だ」

正裕はキャスターの意見に同意した。

素人というのはこの場合いくつか可能性が考えられる。

まず一つは魔術師として未熟なマスターが参加している可能性。そしてもう一つは何も知らない一般人がマスターに選定されてしまった可能性だ。

前者なら良いが後者なら面倒だ。マスターが素人である場合、聖杯戦争や魔術師としてのルールも知らずにルール外の行動を取ることがある。そこから魔術の片鱗が世間に漏れてしまえば厄介なことになる。「神秘は秘匿すべし」が魔術師総てにとっての不文律であるが故に。

だがここで介入して助けたところで、素人マスターである以上何れは殺されるだろう。結果はほとんど変わらない。そのようなことの為に戦いを監視しているだろう他の陣営の前に姿を晒すのは愚策である。むしろ見殺しにしてしまった方が余計な騒動を招かない分良いだろう。しかし――

「白い方のサーヴァントを援護しろキャスター」

「了解、マスター」

正裕の指示を受けて、キャスターは嬉々として動き始める。

彼は助ける道を選んだ。理由は二つ。一つはキャスターの気性。生前に勇者として国を救った彼が目の前で虐げられる弱者を見過ごすことは無く、それを無理に押さえ込めば今後の信頼関係に支障が出かねない。そしてもう一つの理由。それは正裕自身もまた彼女の死を良しとしない甘い人間だということであった。

そもそも召喚の 때가ケチの付き始めであったのだと彼は考える。

彼はこの聖杯戦争においてバーサーカーのサーヴァントを呼び出すと決めていた。

とはいえバーサーカーというサーヴァントの厄介さは彼も知っている。

能力値の高さこそあるが費やす魔力は膨大で、マスターの制御も振り払い、スキルや宝具も十全に扱えないこともあるらしい。

わざわざそんなクラスでサーヴァントを召喚しようと考えたのは、ある英雄の物語を知っていたからだ。

凄まじいほどの守りの力を持つが代償として狂気を齎す「面」を顔に嵌めて戦ったはずの彼は、こと単独の戦いにおいては決して狂気に呑み込まれることなく剣と魔術を駆使し理知を保ったままに戦い抜

いたという。

もとより聖杯戦争とは、マスターの援護こそあれ、基本的には英雄個人で戦うものだ。つまり狂化のデメリットを抑えた上で、その能力向上の恩恵に預かれる。

その目論見があつたからこそそのバーサーカークラスでのサーヴァントの召喚であつたのだ。

しかし召喚を終えたときそこにいたのは狙い通りの英霊ではなく、その英霊と縁深き、ただ狂戦士としてしかふるまえない英霊の姿。

確かに使った触媒はかの英霊の血統にいるものなら呼び出す可能性があるものであつた。しかし、彼の血統にあるものは狂戦士のクラス適正など持たぬはずであつたのだ、本来ならば。

それは、いわゆるもしもの話。「英雄が邪悪なる誘いにより誑かされ、人々に害を及ぼしたりしたら？」などというありえざるイフ。

しかし、そんなイフが実際に起きていたのだ。もつともそれはこの世界とは切り離された平行世界、剪定事象と呼ばれる世界での話であるがそれでもそんな英雄がいた事実がある以上それは召喚されうる。

そんなものを引き当ててしまった彼は当然焦つた。

まず、真名が分からない。剪定事象の事など把握しているわけもなく、身につけた装備品から狙つた英雄の系譜にある英霊だと推測できる程度。バーサーカーであり、理性を失っている以上サーヴァント本人から聞き出すこともできない。

それに魔力消費も問題である。何せ真つ当なバーサーカーを引くなど考えてもいなかったのだ。制御が効き、魔力消費が他のサーヴァントよりも多少多くなる程度なら想定範囲だが、本来のバーサーカーの消費魔力は底なしだ。制御が効かないゆえに莫大な魔力消費を抑えようともせず、無節操かつ無遠慮に魔力を食い潰してしまうのだから。

だから彼は持ち込んでいた使い魔を使って魂喰いまがいのことまでやるハメになった。

そして、市井から魔力を殺さぬ程度に徴収していた際にアクシデントが起こつたのである。

なんと獲物の一人が土壇場でサーヴァントを召喚し、使い魔を撃退したというのだ。

とはいえ素人のまぐれで召喚されたサーヴァントとそのマスター程度、バーサーカーの力ですぐに叩き潰せるはず。

そう考えた彼はそのマスターの居所を突き止めて襲撃したのであった。

「はあっ」

巨漢の振り下ろした剣をアーチャーがナイフで逸らす。アーチャーはそのまま懐に潜り込み一撃を加えようとするが、それは巨漢の持つ盾によって防がれた。

アーチャーと巨漢の戦闘が始まってから30分ほどが経過していた。ナイフを主武装とし素早い動きと時折放つ雷撃や炎弾によって巨漢を翻弄するアーチャーと、長剣を振るい豪快な剣撃と大盾による守りでアーチャーを撥ね退ける巨漢のサーヴァント。どちらもが決定力を欠いたまま戦闘は膠着状態に陥っていた。

(どうする――?)

アーチャーは悩んでいた。理性に欠けたふるまいや戦い方から見るに、相手はバーサーカーのサーヴァントであろうと彼は予測していた。バーサーカーの特徴は理性と引き換えにした高いステータス、そしてそれに伴う魔力消費の多きである。故に持久戦なら息切れを起こすのは相手が先のはずだった、本来であるならば。

しかしアーチャーのマスターは魔術を知らない半人前のマスターであり、魔力の供給には期待できない。魔力不足はお互い様であり、むしろ相手がバーサーカーを扱う為の魔力不足対策をしている可能性を鑑みるならば不利なのはこちらであろう。

選択肢はいくつかある、まず一つは撤退。しかし、マスターの住居が押さえられてる以上追跡に使うための触媒の採取は容易である。何れは追い詰められジリ貧になるであろう。

もう一つの選択肢は宝具の使用。宝具というのは伝説の武具や伝説の再現といった英霊のシンボルであり、その真名を解放する事で戦

況をひっくり返すほどの効果が発揮される。

しかし宝具にはデメリットもある。まずは魔力を大量に消費すること、そして発動に際しその真名を宣言しなければならぬ事である。宝具の名前は自らの伝説に密接に関わるため、それを宣言するというのは自らの正体を明かすのに等しい。例えばエクスカリバーを真名解放すれば、正体はアーサー王であると露見し、能力や弱点を調べられ対策をねられてしまうと云った具合である。

実のところ、アーチャーの宝具に関しては彼本人の正体が露見する恐れは低いのだが、使用する際にデメリットがあり下手をすればマスターに危害が及びかねない。それ故に彼は宝具の使用を躊躇っていた。

その迷いのためかアーチャーの動きにもほんの少し障りが出る。狂戦士より放たれた力任せの斬撃、その一つを捌きそこねたのである。

「くっ」

直撃こそ防いだが、その強烈な一撃はアーチャーの身体を吹き飛ばすのに余りある衝撃を与えた。態勢が崩れたその隙について巨漢のサーヴァントは美奈、アーチャーのマスターへと突貫する。

「まずいつ!?!」

もはや迷っている暇はない、とアーチャーが決断し宝具を使用する為に魔力を高める。

『混沌なる…(キャッスル…)』

そしていざ真名を開放しようとした瞬間、

「ぐおおおおおおお!?!」

横合いからの一撃を受けて、巨漢がふっ飛ばされた。

「何!?!」

アーチャーが慌てて攻撃が来た方向を見ると、矢を放ち終えた姿のままに公園の植え込みに潜む緑衣のサーヴァントがいた。

緑衣のサーヴァントはアーチャーの視線に気がつくのとニコリと笑い、それから軽く顎をしゃくってアーチャーの背後を示す。

「ぐうおおおおおおおおおおおおお!!」

彼が慌てて振り向くとそこには未だ健在な巨漢の姿がある。攻撃を食らった怒り故か、がむしやらに繰り出された剣戟を潜り抜け、アーチャーは巨漢の右胸に斬りつけた。

「うおおおおおおお…」

弓の一撃から立て続けに痛打を受け、巨漢が悲鳴を上げる。そのまま巨漢は自らの実体を解き、その姿を消した。死んだわけではない。霊体化による逃走である。

サーヴァントの本質は英霊、即ち霊だ。故に実体化を解けばたちまち霊体となる。巨漢のサーヴァントはこの場での勝利を諦め、実体化を解いてこの場を離脱したのである。

巨漢のサーヴァントの気配が遠ざかっていきやがて確認できなくなる。アーチャーは新手、即ち繁みに佇むサーヴァントへと鋭い視線を向けた。

「それで、どういふつもりで俺達を助けたんだ？」

四話 少年

「それで、どういうつもりで俺達を助けたんだ？」

油断なくナイフを構えながら、緑衣のサーヴァントに問を投げる。緑衣のサーヴァントは手にした弓の実体化を解いて魔力に還すと、涼やかな笑みを浮かべた。

「いや、その子がどうにも聖杯戦争のことをわかってないみたいだったからね。覚悟を持った参加者でもないマスターを射殺す、というのも目覚めが悪いじゃないか」
「なるほど」

その発言を受けて、アーチャーは軽く唇の端を持ち上げた。

巨漢のサーヴァントを撃つことができたということはサーヴァントから離れていたマスターを狙えたというのと同義である。

マスターを失えばサーヴァントはその存在を保てなくなる。なぜならサーヴァントはマスターの魔力供給と、マスターとの縁に頼って現世に留まっているからだ。

そのマスターを放置したならば、相手にはすぐにこちらをどうこうする気は無いだらうと推測できた。

「それで？その子は聖杯戦争についてはどこまで知っているのかな？」

「え？わ、私？」

話についていくことができずに今まで固唾を飲んで状況を眺めていた少女は、唐突に話を振られて、驚きに身をこわばらせた。

「えーと、その、何か魔術師の殺し合いだとか言うのは聞いたけど…」

「マスター！」

「えっ、あつ、ごめんなさい！」

問に答えようとした美奈へとアーチャーが叱責する。

「なるほどね」

緑衣のサーヴァントは相槌を打つと、数秒何かを考えるような顔つきをして、

「どうだろうか？良ければうちのマスターから色々説明してあげられる

と思うけど、会ってみる気はない?」

そんな提案を持ちかける。

「断る」

少女が返答するより早く、アーチャーが拒絶した。

驚きを顔に浮かべる少女と、「まあそれはそうだ」と言うように肩をすくめる緑衣のサーヴァント。

「理由は?」

「悪いがそちらを信用できない、こちらを誘い込んで令呪を奪われる可能性だつてあるしな。そもそもマスターが聖杯戦争について知らないなんて誰が言ったんだ?」

アーチャーはそう返すが、美奈の反応を見ればあからさまに聖杯戦争について詳しくは知らないと言っているようなものではある。しかしここで弱みを見せるわけには行かなかった。

「あはは」

投げた問へに対する冷たい返答にバツが悪そうな顔をして、緑衣のサーヴァントはぽりぽりと頬を掻いた。

「それじゃあ、こつちから出向いたらどうかかな?」

そういつていたはずらっぽく笑う緑衣のサーヴァントをアーチャーは怪訝そうに見つめ……、近づいてきた何者かの気配に公園の入り口へと視線を向けた。

そこにいたのは一人の男性である。頭の前から踝近くまでをすっぽりとローブで覆い隠している。顔の辺りは流石に露出しているのだが、幻惑の術でもかかっているのかどうにもぼやけてよく分からない。その周囲には魔道の気配を漂わせ、見るものが見れば彼の正体が魔術師であることが伺い知れるだろう。

「はじめまして。僕がそのサーヴァント、キャスターのマスターだ」
そう言つて来訪者、キャスターのマスターである小野正裕は芝居がかった仕草で一礼した。

「キャスター?」

正裕の言葉を受けて、青年のサーヴァントが怪訝そうに顔を歪め

た。

(まあそうだよな)

かつての自分と同様の反応をみて、正裕は胸のうちで賛同した。剣を背負い弓を扱うキャスターなど普通は想像し得ないだろう。

「とにかく、そいつはキャスターで俺はそのマスターだ。さて、えーと…」

正裕は言葉を詰まらせると、

「すまないそちらのクラスは何だろうか？」

そう青年のサーヴァントに問いかけた。

サーヴァントはクラス名で名乗り、呼び合うのが普通である。しかし、青年と巨漢のサーヴァントに関しては特に名乗りもなく会話もなく戦闘を行っており、結果としてクラス名が不明のままであった。まあ巨漢の方に関してはバーサーカーであろうと予想されてはいたが。「俺のクラスはアーチャーだ」

そう答える青年のサーヴァント、もといアーチャー。

「アーチャーか、了解した。さてアーチャーとそのマスターに提案がある、こちらと同盟するつもりはないか？」

右手を差し出しつつの提案。

「私は…」

「断る」

しかしその提案は先程と同じくアーチャーによって却下された。しかもマスターの発言をぶち切って。

「助けてくれたことに感謝するが、そこまで信用はできない」

そう告げるアーチャーの傍らで彼のマスターはおろおろしながら事態を眺めていた。

そんな彼女の姿を見て微笑ましく思いながら、正裕は更に話を続けた。

「そうかそれは仕方ない。だがアーチャー、君のマスターは見たところ魔術師未満の見習いだ。それでも同盟は組まないというのか？生き抜く上で味方はいたほうがいいぞ、お互いにな」

アーチャーの顔が一瞬歪んだ後、すぐに平静を取り戻す。どうやら

凶星のようであった。

「隠したくなる気持ちもわかるけどな。こちらも魔術師としての流儀を知らないままに聖杯戦争に参加されても困るんだ。同盟は組まなくてもマスターと話だけはさせて欲しいのだが」

正裕の要請を受けてアーチャーは苦々しそうに顔を歪め、やがて大きなため息をついた。

「仕方ない、か」

諦めたように、アーチャーの口からぽつりと言葉が漏れる。

「とりあえず、ここは監視されてるだろうから場所を移したほうがいいと思うんだけど」

「そうだなそうしよう」

自らのサーヴァントからの進言に正裕は軽く頷いて同意を示す。

サーヴァントの戦いは監視するのが定石だ。敵の情報は大いに越した事はないのである。運良くサーヴァントの真名やマスターの居場所や素性を探れば、それは勝敗をも左右しかねない貴重な情報である。

「監視、か」

アーチャーが呟き、ぐるりと首を巡らせそして、

「そこか」

四方へと雷撃を放った。

電撃は藪の中、電柱の上方、遊具の陰等にとんでいきそこにいた何かを黒焦げにした。

どうやら潜んでいた使い魔を一掃するための攻撃であつたらしいそれにより自身の使い魔も撃墜され、正裕は使い魔からのフィードバックを受けて軽くよろめいた。

「俺の使い魔もいたんだが、出来れば相談してからやってくれ」

恨みがましく漏らす正裕を、しかしアーチャーは横目でちらりと見たのみにとどめた。その視線は公園のとある一点を凝視したまま動かない。

「おい、そのサーヴァント。そこにいるのは分かっているからさっさと去れ」

アーチャーの忠告の後、何もなかったはずの場所から何かの気配が滲み出した。唐突に現れたその何かにアーチャーを除く三名は身構える。

「へえ、スゴいね。俺のこと見えるんだ」

幼さを残した気楽そうな少年の声が響き渡り、サーヴァント二人は怪訝そうに眉をひそめる。

「良いよ、引いてあげる。サーヴァント二人じゃ分が悪いし」

気配を消して潜んでいたことを考えるとアサシンであるはずなのだが、その言葉からは暗殺者の冷酷さと程遠い無邪気さを感じさせた。

「じゃあね」

直後その気配が消えた。

アーチャーは周囲を見回すと「ふう」と軽く息を吐く。

「これで近くに監視はいなくなったはずだけど」

「助かったよアーチャー。多分あれはアサシンだろう。あんなのに追跡されたらたまったものじゃない」

「まったくだ、周囲を探って正解だったよ」

キャスターの言葉を受けて、アーチャーはその顔に少しの安堵を浮かべた。

「あのー、アサシンって暗殺者のことだよね？」

「それは後で説明しようか。とりあえず場所を変えてからだ」

不安そうに尋ねる美奈への解答を先送りにして、正裕はその場を離れるよう三人を促すのであった。

「いや〜まさか見破られるなんて思わなかったよ!」

呑気な声を上げて帰還してきた少年の姿をしたサーヴァントに軽く殺意を覚えつつ、アサシンのマスターである彼は己の従者を問い質した。

「何故アーチャーのマスターを殺さなかった？」

アーチャーとバーサーカーらしきサーヴァントの戦闘が始まった際、彼はアサシンにアーチャーのマスターを殺すよう命じていた。し

かし、アサシンはそれを拒否していたのである。

「だって何も知らない女の人を殺すのなんて嫌だし」

「は？」

予想外の理由を聞かされて、彼は二の句をつげなかった。まさかアサシン、暗殺者のクラスであるサーヴァントがそんな理由で相手のマスターを殺すのを躊躇うなど誰が思うものか。

「それにあの時手を出してたら多分アーチャーとバーサーカーを同時に相手するハメになったと思うぜ。あそこは手を出さないのが一番。そうじゃない、マスター？」

「さて、何故バーサーカーまで敵に回る？」

無邪気に笑いながら言うアサシンに問う。

「ん？だってマスターがバーサーカーのマスターだったとしたらどっちを狙うんだ？」

「まずアーチャーはアサシンを攻撃するだろうし、したらバーサーカーはフリーになるか。アーチャーはマスターが死んで放置しても問題ないし、そうなるよ…」

問い返されてアサシンのマスターは思考を巡らし、はっと気がつく。

「そうか、バーサーカーのマスターにはアーチャーを攻撃する理由がないのか」

「ピンポーン、大正解」

大輪の笑顔を咲かせるアサシン。その姿もあいまってとても微笑ましいものである。

「それにほら、オレアサシンじゃん？そしたら真っ先に潰したいと思うよね、そんな危険なやつはさ」

アサシンが気配を消してのマスター殺しを得意とする以上、どのマスターもアサシンの存在を恐れている。そんなアサシンが目の前で姿を表したら全力で潰しにかかるに違いない。

「ああ、そうだな…」

従者、それもこんな少年の姿をした、に言い負かされて彼は意気消沈する。

(悪いサーヴァントではないと思うんだけどな。うん)

彼が気を沈めた理由はそれだけではない。

本来彼が狙っていたのは別の英霊であった。

その英霊は忍びの頭領の長子であったが、その忍びたちの力を恐れ
た大名に里を焼かれた。しかし彼は生き延びることとなりやがて大
名の首を獲り、仲間達の仇を討ったという。

その大名の暗殺劇自体に謎が多いために数ある伝説の一つ、いわば
与太話の一つ、として語られていたのであるが、アサシンのマスター
はその英霊の遺品を得ることに成功したのであった。

その遺品を触媒にして呼び出されたのが彼である。

しかし彼はその英霊そのものではなく英霊の義弟に当る人間であ
り、その英霊よりも弱いらしい。

(まったくどうなることやら…)

この先の展開を思い、彼は頭を抱えずにはいられなかった。

五話 桃色

『ライダー、状況はどうなってる?』

『ぼーよー!』

『ごめん、何でもない』

マスターからの念話があったが彼、ライダーのサーヴァントの返答は意味の分からない言葉のみである。

ふざけているのではない、そもそも彼はろくに話せないのだ。

ライダーは夜空を飛んでいた。とは言っても彼が己の力で飛んでいるのではない。ライダー自身も短時間は飛行することもできるのだが長時間の飛行となると、彼の乗騎に任せる事となる。その乗騎、紫の羽毛に包まれた大きなフクロウはその頑強な脚と爪で主をしつかりと掴んで飛行していた。傍から見たその姿はフクロウが『ピンクのヌイグルミ』を掴んで飛んでいる様に見えたであろう。

彼はマスターに言われて偵察に出ていた。彼はまともに喋ることは出来なかつたが、それでもマスターがその視覚を借りれば十分に斥候としての役目は果たせる。そもそも使い魔などともに喋れないのがほとんどである。ライダー自身は喋れないとはいえ話を聞いて理解する程度はできるので、まあ問題はないといえる。他のサーヴァントと比べなければ。

『ぼーよ、ぼよぼよ!』

ライダーが乗騎へと指示を出す。

流星にライダーと生前から縁があるというべきか、フクロウは彼の望む場所を目指して進路を変更した。

行き先はとある住宅街、二人のサーヴァントが激突するその場所であつた。

『ライダー、状況はどうなってる?』

『ぼーよー!』

『ごめん、何でもない』

帰つた来た返答の余りの意味不明さに、ライダーのマスターであるフォリオ・バルデルはため息をついた。

彼が召喚したサーヴァントはライダーとしては強力な部類に位置するサーヴァントである。大気圏の脱出と突入すら可能とする飛行能力、他者の力を解析し自らのものとする異能、場所を選ぶことなく戦い抜くその適応力、数多くの困難・数多くの戦場を勝ち抜いたその武勇はどんな英雄達にも劣ることの無いものである。

もつともその裏には数多くの難点を抱えていたのだが。

まずは言語能力の低さ。意思疎通はある程度できるから致命的とは言いがたいが、他のほとんどのサーヴァントよりも劣るのには違いない。

思考の幼さ。ライダーはまともな思考能力を持たず、やや本能に忠実なきらいがある。それゆえに制御が効かず、迂闊な行動を取る恐れがあった。

そして何より、正体がすぐに露見すること。なにせ外見がピンクの球体に顔があり、ピンクの手と赤い足がついているというものである。もはや正体など一目瞭然であった。

それらの難点は召喚前に十分にわかりそうなものであったが、その英雄の圧倒的な能力に目が眩んだフォリオは迂闊にもそれを見逃してしまっていたのであった。

「…取り敢えず戦わせるのは暫くなしだな、うん」

一人で結論づけて、一人で頷くフォリオであった。

六話 騎士

『マスター、サーヴァントの気配を見つけたがどうする?』

「気配は一騎だけ?」

『そうだが、仕掛けるのか?』

己のサーヴァント、ランサーからの報告を受けて彼女、樋口神奈（ひぐちかな）はふむ、と黙考した。

気配が一騎のみであるならば混戦にはならない。ならばここは様子見で一線交えてみるのも悪くはないはずだ。幸い今夜は他の場所でもサーヴァント戦が起きている。ならば、こちらへの注目度は下がるだろう。警戒すべきアサシンも先に開戦しているそちらの戦場にいる可能性が高い。

「いいわ、あなたの實力見せて頂戴ね、ランサー」

仕掛けるなら今だ、と神奈は決断しランサーに攻撃の許可を出す。

『了解した。この槍に誓って、マスターに聖杯を捧げてみせよう』

「ええ、楽しみにしてるわ」

気障に返すランサーの言葉に、クスリと笑みを浮かべながら神奈は念話を打ち切った。

彼女が呼んだ英霊は槍の英雄としてはかなりの知名度を持つ英霊であった。

高い機動力と白兵戦能力に加えて、簡易な魔術も修め、さらに、これは神奈自身持っているとは予想していなかったが、低級の竜種を役し騎乗する能力を持っていた。

白兵戦に加え、竜に騎乗しての空中戦をもこなすその能力はもはやランサーとライダーのハイブリッドと言っても過言ではない。

その伝説において多少不穏な所はあったが、その原因はそもそも彼の間関係やその数奇な巡りあわせにあったと考えると聖杯戦争においては大した障害にはならないと考えられる。

事実彼の伝説ではむしろ誇りある騎士として、恩義ある相手に対しても悪を悪として見逃さぬ正義漢として描かれていた。

「さて、こっちはどうなってるかしらね」

念話を切った神奈は、そう呟いて目の前の卓上においてある水盆を眺める。

そこにはバーサーカーらしき巨漢と白いコートを羽織ったサーヴァントの戦いが映し出されていた。

「多分こつちはバーサーカーよね…。白いのはいせ이버とかライダーって感じでもないしアーチャーかキャスターかしら？バーサーカーと渡り合えるんだからアーチャーよねきつと」

ぶつぶつと呟きながらサーヴァントのクラスを予想する神奈。まあ、今回のキャスターは白兵戦が得意と豪語する変わり種なのだがそれは彼女の知るところではない。

そんな彼女の予想はこの後弓を扱う緑衣のサーヴァントが現れた事で修正を余儀なくされ、その後クラス名が判明した際に軽くキレる事となるのだが、それはまた別の話である。

「お前か、俺をここに呼んだのは」

住宅街の一角にある広々とした空地、ランサーがサーヴァントの氣配を追ってたどり着いた場所に立つのは黒衣に身を包んだ一人の男であった。

この土地には巨大マンションが建つ予定であるが、今はまだ更地となっている。仮囲いもされておらず、サーヴァントが立ち会う上では絶好の場所であった。

黒い甲冑に身を包んだランサーはその手に愛用の槍を呼び出すと、油断なく目の前の相手を睨めつけた。

「ほう、ランサーか。あちらにも楽しんでる連中がいるみたいだからな。折角だ、こちらにも楽しまないと損だとは思わないか？」

そう言っつて、人好きのする笑顔を浮かべる黒衣のサーヴァント。その手にはいつの間にもやたら長剣が握られている。

「戦闘狂め。その剣、セイバーだな。まあいいさ、どうせサーヴァントを倒さなければ勝利できないのには変わらない。ここで潰させて貰うぞー！」

そう宣言して槍を構え、ランサーは突進する。

そしてその勢いのままに一撃を放つと思われたその瞬間、ランサーの姿はセイバーの眼前で唐突に掻き消えた。

「何?!!」

咄嗟に前方へとその身を踊らせるセイバー、その残像を上空から急降下したランサーが刺し貫く。

「ちいっ!」

振り向きざまに放たれたセイバーの横薙ぎは、しかしランサーの下からの切り上げによって阻まれた。

金属音がけたたましく鳴り響き、火花が舞い散る。セイバーはランサーの一撃を受け止めながら、その反動を利用して大きく後方へと飛び退った。

「今のを凌ぐとは流石だな、セイバー。流石に最優、そう簡単には奪れはしないか」

「流石に今のはヒヤリとしたぞ。最速のクラスに偽りは無いということか」

互いに互いを讃えながら、しかしその相手を討つべく得物を構えて駆け出す。

7つのクラスの中でとりわけ白兵戦に長じた二騎の戦いはまだ始まったばかりであった。

七話 剣と…

斬撃が風を斬り裂き、刺突が虚空を穿つ。

火花が夜闇を照らし出し、金属音が静寂を乱した。

サーヴァント、それもセイバーとランサーによる剣戟はその余波だけでも周囲の仮囲いを切り裂き、地面を抉り取っていく。

竜を模した黒い甲冑に身を包みながらも身軽な動きを見せるランサーと、質の良さそうな黒い衣服に白い外套を羽織るセイバー。

人払い結界に守られ横槍の入らぬままに続く二人の戦いはかれこれ一時間は経過していた。

「これが人間業なのか」

使い魔の視覚を通じて戦闘を見ていたセイバーのマスター、辰尾勇馬（たつおゆうま）はただの余波のみで周囲を破壊せしめるその威力に驚愕していた。

英霊達は別に街を壊すつもりもなく、互いの敵を見据えて戦うのみである。

躲されて行き場を失った一撃が直撃して周囲を破壊するのはわからなくもない。しかし、互いに剣と槍をぶつけ合っているだけでもなお衝撃と斬撃の余波が離れた所にある物体に被害をもたらし、地面を掘り返すのである。これを脅威と言わなければ何を脅威と言えるであろう。

「しかし、教会の連中には感謝しないとな」

勇馬はこの風宮市の霊地を管理する管理者に当る魔術師である。

聖杯戦争の開催には質のいい霊地が求められる。それは聖杯戦争には莫大な魔力を必要とするからだ。そしてその霊地を聖杯戦争の主権者として提供しているのが勇馬であった。

さて管理者である以上本来ならば魔術に関するトラブル、例えばこういうった街への被害についても対処するのが筋である。

しかし今回それは勇馬の仕事ではなかった。なぜなら聖杯戦争は聖堂教会、神秘の管理者を標榜する宗教組織、が調停役として様々なトラブルに対処するからだ。もちろん管理者として彼らに多少の便

宜を図り、協力することもあるが、面倒ごとはほとんど丸投げにしてしまえるのは勇馬にとつて歓迎すべきことである。教会の連中に自分の土地で大きな顔をされるのは気に食わなくはあるが、少なくとも聖杯戦争に参加しつつ管理に奔走するよりは百倍ましであった。

「さて、そろそろ退き時か」

彼はそう決断し、セイバーに思念を送る。

このまま続けても決着はつきそうにない以上被害が広がるのみである。宝具の解放という手もあるがそれは初戦から行うものでもない。

相手もそれをわかっているのであろう。ランサーは特に追撃もせず、セイバーの離脱を見送るのみであった。

「帰ったぞ」

「よくやったな」

そんな粗野な言葉と共に帰還して来たセイバーを勇馬は労いとも迎えた。

「あんなのでいいのか？」

セイバーが怪訝そうに尋ねてくる。最優のセイバーでありながら全力もだせずランサー相手に押しきれなかった事が不満であるのだろう。

「いや、あれでいい。あの宝具を使った状態でも十分に戦えるのが分かったからな。確かにここで一騎潰せたかもしれないんが所詮はまだ序盤だ」

勇馬はそういつて静かに嗤う。

セイバーの宝具の一つは強力ではあるが、デメリットによる能力制限がかかる。今回の初戦においてはあえて能力に制限をかけた状態で戦闘に臨んでいた。能力制限下での戦力の把握の為だ。

結果は上々であった。白兵戦に強いランサーのクラス相手に、多少押され気味とはいえ互角に戦い抜いたということは、すなわち聖杯戦争を能力制限をかけた状態でもなお戦い抜ける力があることの証左である。

「そうだよセイバー」

と、勇馬の後より何者かが唐突に現れセイバーに語りかけた。サーヴァントの出現である。紫で裏打ちされた黒いローブを頭から被るサーヴァントの登場に、しかし勇馬もセイバーも別のサーヴァントが現れたことに驚くことも慌てることもなく平然としている。それは彼がセイバーと同じ魔術師をマスターとする同志であるが故にであった。

「次に君と戦う時、ランサーは君の実力を見誤った上で戦うことになるだろう。これも策の内だよ。それに本来なら僕も戦うんだ。頼りにしてるよ」

にこり、と親愛の念とともにセイバーに笑顔を向けるサーヴァント。

「キヤスター、ああ俺も頼りにしてるよ」

セイバーはそんなサーヴァント、キヤスターと呼ばれた、へ信頼の籠もった眼差しを向けた。

通常、一人のマスターは一体のサーヴァントのみを従えるのが普通である。

しかし、一人のマスターが二人以上のサーヴァントを従えるのが不可能な訳では無い。アーチャーが正裕に対しても疑いをかけた令呪の強奪というのはその手段の一つである。もつとも、多大な魔力供給量をどうクリアするかという問題はあるのだが、できない訳ではない。

しかし、七騎のサーヴァントを超えてサーヴァントが存在すること、そして一つの聖杯戦争において一つのクラスに二騎のサーヴァントが割り当てられることは明らかに異常であった。

緑のキヤスターと黒いキヤスター、二人のキヤスターをその裡に抱えた聖杯戦争がこの夜、開戦を迎えたのであった。

一章終了時点ステータス表（ネタバレ？）

【CLASS】 キャスター

【マスター】 小野正裕

【真名】？

【身長・体重】 172 cm・75 kg

【イメージカラー】 緑

【属性】 秩序・善

【性別】 男性

【特技】 剣術、射撃

【好きなもの】 平和

【嫌いなもの】 邪悪

【天敵】？

【ステータス】 筋力B 耐久C 敏捷B 魔力B 幸運A 宝具A

『保有スキル』

〈クラス保有スキル〉

・ 道具作成 (C)

・ 陣地作成 (―)

〈固有スキル〉

・ 陣地踏破 (A)

・ 妖精の加護 (B)

・ 魔獣殺し (B)

・ ???

【解説】

・ 道具作成

キャスターのクラススキル。

生前使用していた道具をもとにした様々な道具を作成する。

・ 陣地作成

彼は魔術師では無いので工房は作成できない。

彼にとって陣地は作るものではなく攻めるものである。

・ 陣地踏破

数多の迷宮や敵陣に突入・踏破した経歴がスキルとなり、陣地作成と混じったもの。

敵陣に挑む際に様々なボーナスが与えられる。

・妖精の加護

精霊の加護の互換スキル。

妖精からの祝福により、危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せる能力。

・魔獣殺し

魔獣の殺し方や対処法。

幻想種を相手にした際に様々なボーナスを得る。

生前数多くの魔獣を相手にしたキャスターにとって魔獣の相手はお手の物である。

・???

キャスターの持つ特殊スキル。

詳細不明。

〈所有宝具〉

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

彼の持つ聖剣。彼の伝説の象徴とも言えるもの。

『氷炎と守護の赤青（ツインレッド・ツインブルー）』

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：—

最大補足：1人

由来：？

彼の持つ赤と青のスタッフと赤と青のロッド二組、計四本の魔杖。能力は以下の通り。

- ・ 赤のロッド：炎を放つ。
 - ・ 青のロッド：氷や凍気を放つ。
 - ・ 赤のスタッフ：魔力によるブロックの作成。
 - ・ 青のスタッフ：使用者を守護する光弾を生み出す。
- ひとつひとつは大した能力ではなく、真名の解放も必要としない。

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

詳細不明。聖剣と合わせて使用するものであるらしい。

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

詳細不明

【解説】

正体がわかりやすい人。そして、作品のタイトルに出てくる人そのいち。

作者としてもこの人はわかるだろうという前提で書いていたりする。

キヤスター以外だとセイバーかアーチャーの適性がある。

相性が良いのはセイバーで、聖剣と高ステータスで押し切れる優良サーヴァントとなる。

アーチャーは聖剣が使えないが豊富な攻め手と強力な宝具を持つ。キヤスターの場合は聖剣も使えて攻め手も豊富なのだがステータスが低く器用貧乏。聖剣の威力も落ちてしまう。

【CLASS】アーチャー

【マスター】白山美奈

【真名】？

【身長・体重】175cm・71kg

【イメージカラー】白

【属性】混沌・善

【性別】男性

【特技】料理

【好きなもの】平穩

【嫌いなもの】運命

【天敵】？

【ステータス】筋力C 耐久C 敏捷A 魔力A 幸運C 宝具A

『保有スキル』

〈クラス保有スキル〉

・単独行動 (B)

・対魔力 (C)

〈固有スキル〉

・専科百般 (D)

・???

【解説】

・単独行動

マスターからの魔力供給を断つてもしばらくは自立できる能力。

ランクBならば、マスターを失っても二日間現界可能。

・対魔力

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。
・専科百般

生前の戦いにおいて身につけた諸々の武器の技能。
その殆どがEランクとなる広く浅い習得である。

護身程度の武器術であるが、例外的にナイフに関してはCランク程度の習熟度となる。

・???

アーチャーの持つ特殊スキル。
詳細不明。

〈所有宝具〉

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

詳細不明。

『混沌なる…（キャツスル…）』

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

詳細不明。真名の前半のみ判明しているが…？

【解説】

作品のタイトルに出てくる人そののに。

タイトルだけを見ると性別の違う別の人を想像したと思われる。

アーチャーとキャスターそしてバーサーカーの適性がある。
能力は下がるもののキャスターとの相性が良い英霊。キャスターとアーチャーはクラスを入れ替えたほうが強いかもしれない。
ちなみにバーサーカーの場合はスパルタクス以上にヤバイので召喚したら即アウトの代物である。

【CLASS】バーサーカー

【マスター】？

【真名】？

【身長・体重】 192 cm・115 kg

【イメージカラー】黒

【属性】混沌・善

【性別】男性

【特技】剣術

【好きなもの】自らの選択

【嫌いなもの】定められた道筋

【天敵】？

【ステータス】 筋力A 耐久A 敏捷B 魔力B 幸運D 宝具B

『保有スキル』

〈クラス保有スキル〉

・狂化 (B)

〈固有スキル〉

・精霊の加護 (―)

・魔術 (―)

・竜殺し (C)

・戦闘続行 (A)

【解説】

・狂化

幸運を除いたパラメーターを1ランクアップさせるが、理性の大半を奪われる。

・精霊の加護

本来ならばAランク相当。しかしその加護は失われている。

・魔術

本来ならばCランク相当。しかし魔術を使うことはできない。

・竜殺し

竜殺しを為しとげた者。

竜種及びその属性を持つものと相対した際に有利な補正を得る。

・戦闘続行

往生際が悪い。決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能。

〈所有宝具〉

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

彼の持つ宝剣。彼の伝説の象徴とも言えるもの、のはずだった。

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

詳細不明。

【解説】

その姿はガチの変態。

原作では割と可哀想な人。ただしこの作品でも特に救済はない。悪堕ちイフに関しては公式のものだったりする。

適性のあるクラスはバーサーカーの他にセイバー。セイバーの場
合は使用不能スキルも開放されてオーソドックスに強いサーヴァン
トとなる。ただし第二宝具が変わる。

【CLASS】アサシン

【マスター】？

【真名】？

【身長・体重】145cm・47kg

【イメージカラー】金

【属性】秩序・善

【性別】男性

【特技】パズル

【好きなもの】義兄

【嫌いなもの】不義

【天敵】？

【ステータス】筋力C 耐久C 敏捷A 魔力D 幸運B 宝具C

『保有スキル』

〈クラス保有スキル〉

・気配遮断 (C)

〈固有スキル〉

・直感 (C)

・軽業 (C)

【解説】

・気配遮断

サーヴァントとしての気配を絶つ。

完全に気配を絶てば、発見することは非常に難しい。

ただし自らが攻撃態勢に移ると気配遮断のランクは大きく落ちる。

・直感

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。

・軽業

身の軽さ。

ほとんどの地形で十全に戦闘力を発揮できる。

〈所有宝具〉

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

詳細不明

【解説】

作品投稿開始時点では真名が確定してなかった人。色々悩んだけど結局この人に。義兄に関しては原作でも最強クラスに強いので彼が弱いという訳ではない：はず。

大名暗殺云々に関しては原作でちよろつと触れられた程度。史実サーヴァントではないのでそっちから予想するのは無理。暗殺された方は史実にいるのだが。

適性クラスはアサシン以外だとアーチャーが該当する。気配遮断による奇襲と武装の相性が良いのでアサシンとの相性は悪くない。アーチャーの場合はステータスとクラススキルが変わる。宝具は変わらないのでクラスはお好みで。

【CLASS】ライダー

【マスター】フォリオ・バルデル

【真名】星のカービィ

【身長・体重】20 cm程度・不明

【イメージカラー】ピンク

【属性】混沌・善

【性別】男性？

【特技】吸い込み

【好きなもの】 食べること・眠ること

【嫌いなもの】 平和を乱す存在

【天敵】 毛虫

【ステータス】 筋力C 耐久A 敏捷B 魔力A 幸運A 宝具A

『保有スキル』

〈クラス保有スキル〉

・ 騎乗 (A++)

・ 対魔力 (C)

〈固有スキル〉

・ 環境適応 (EX)

・ 飛行 (C)

【解説】

・ 騎乗

竜種を含むすべての獣、乗り物を乗りこなすことができる。

・ 対魔力

Cランクでは、魔術詠唱が二節以下のものを無効化する。大魔術・儀礼呪法など、大掛かりな魔術は防げない。

・ 環境適応

あらゆる環境で生存できる。

マグマの流れる地底や超上空、水中に海の底、氷点下の環境に加えてなんと宇宙空間ですら問題なく活動可能である。

・ 飛行

空を飛べる。

飛行時間は一分ほどであり、あまり早く飛べない。

また、一部の能力が制限される。

〈所有宝具〉

『星を呑む者 (ホールイーター)』

ランク：A

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1

由来：ライダーの持つ特殊能力、吸い込みと呑み込み。
様々なものを吸い込んで呑み込む。

呑み込む際には大きさや重量・耐久・魔力等で判定を行い、判定に成功した対象を吸い込む事ができる。

ギリギリまで弱らせてしまえばサーヴァントすら取り込めるが、条件は非常に厳しい

また、呑み込んだ対象の能力や概念を素にアレンジして自らの能力として使用することが出来る。取得した能力は時間経過や甚大な損傷を負った際に解除される。また同時に2つ以上の能力を取得する事は出来ない。

『絆の友（カービィフレンズ）』

ランク：C

種別：対人宝具

レンジ：—

最大補足：—

由来：ライダーと共に戦った友人達。

彼と苦楽を共にした友人たちを召喚する。

召喚は一度に一体まで可能。

召喚可能な乗騎は以下の6体で、大きさはライダーと同程度。

リック：二足歩行のハムスター。地上における機動力に優れ、劣悪な足場をも苦としない。

クー：フクロウ。空中での機動力に優れており、強風にも逆らって飛ぶことができる。

カイン：マンボウ。水中での機動力に優れる。激流にも逆らって泳ぐことができる。

ナゴ：二足歩行の猫。陸上での小回りが効くリックに対し、こちら身軽な跳躍を得意とする。

チュチュ：謎の軟体生物。触手を伸ばしたり、天井に張り付いたり

と柔らかい体を活かした動きを得意とする。

ピッチ：小鳥。空を飛べるがクローには劣る。ただし陸上において意外と素早い動きを見せる。

彼らは『星を呑む者』で取得している能力に合わせて様々な連携を取る事が可能である。ただし連携ができない能力もある。

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

詳細不明。

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

詳細不明

【解説】

みんな大好き星のカービィ。

こんなわかりやすい外見のサーヴァントの真名を隠せるわけ無いので初の真名開示サーヴァントに。

ライダーとして該当する宝具はまだまだあるのだが聖杯のキャパをオーバーしかねないので再現されていない。

基本的には星のカービィ3のカービィだと思って間違いないだろう。

適性クラスはセイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカー。まさかの基本クラス制覇である。多

すぎる上にどの側面で呼ばれるかによって色々変わるので違いについては割愛。多分『星を呑む者』だけは共通。

【CLASS】ランサー

【マスター】樋口神奈

【真名】不明

【身長・体重】183cm・63kg

【イメージカラー】黒

【属性】秩序・善

【性別】男性

【特技】槍術

【好きなもの】???

【嫌いなもの】自分

【天敵】不明

【ステータス】筋力A 耐久B 敏捷A 魔力C 幸運E 宝具A

『保有スキル』

〈クラス保有スキル〉

・ 対魔力 (C)

〈固有スキル〉

・ 騎乗 (A++)

・ 竜騎跳躍 (A)

・ 竜使役 (B)

・ 魔術 (D)

【解説】

・ 対魔力

術詠唱が二節以下のものを無効化する。大魔術・儀礼呪法など、大掛かりな魔術は防げない。

・ 騎乗

竜種を含むすべての獣、乗り物を乗りこなすことができる。

・ 竜騎跳躍

天高く跳ぶ驚異的な跳躍力。壁や障害物を蹴つての空中機動も可能である。

・竜使役

竜と心を通わせ使役する才能。彼は特にこの才能に秀でていたとされる。

さらに自らの乗騎として低級の飛竜を一体召喚可能。

・魔術

簡易な魔術を使用できる。

治癒の術と自己強化、妨害の魔術を使用可能。

<所有宝具>

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

彼の所有する槍。詳細不明。

【解説】

色々ネタにされてたりする人。

無辜の怪物とかにして再現する案もあったけど流石にやめました。

そして幸運はE。別に運が悪いからランサーにしたわけじゃないんだけどなあ。これがランサーの運命か。

適性クラスはランサーのみ。

【CLASS】セイバー

【マスター】辰尾勇馬

【真名】？

【身長・体重】182cm・85kg

【イメージカラー】黒

【属性】秩序・善

【性別】男性

【特技】 剣術

【好きなもの】 友との絆

【嫌いなもの】 運命

【天敵】？

【ステータス】 筋力A 耐久A 敏捷B 魔力B 幸運B 宝具A

【能力制限時】 筋力B 耐久B 敏捷C 魔力C 幸運B 宝具A

『保有スキル』

〈クラス保有スキル〉

・ 対魔力 (C)

・ 騎乗 (C)

〈固有スキル〉

・ カリスマ (B)

・ 連携 (B)

【解説】

・ 対魔力

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

・ 騎乗

騎乗の才能。大抵の乗り物、動物なら人並み以上に乗りこなせるが、

野獣ランクの獣は乗りこなせない。

・ 連携

一対一の戦闘ではなく、仲間と連携した上での戦闘技能。

味方と連携しての戦闘時にステータスが上昇し、最適な行動を取れるようになる。

・ カリスマ

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

カリスマは稀有な才能で、一国の王としてはBランクで十分と言える。

〈所有宝具〉

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

彼の持つ聖剣。彼とその一族の伝説の象徴。

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

詳細不明。

【解説】

色々とネタにされてる人そのに。

まあ無辜の怪物がつくようなものでもないのだけど。

適性クラスはセイバーのみ。

【CLASS】 キャスター？

【マスター】 辰尾勇馬

【真名】 ？

【身長・体重】 178 cm・77 kg

【イメージカラー】 黒

【属性】 秩序・善

【性別】 男性

【特技】 軍略

【好きなもの】 策を練ること

【嫌いなもの】 料理すること

【天敵】？

【ステータス】 筋力B 耐久C 敏捷C 魔力B 幸運B 宝具B

『保有スキル』

〈クラス保有スキル〉

・ ???
・ ???

〈固有スキル〉

・ 魔術 (C)

・ 連携 (B)

・ 軍略 (B)

・ ???

【解説】

・ ???
・ ???

・ 魔術

攻撃に用いる魔術を習得。特に雷の魔術を得意とする。

・ 連携

一対一の戦闘ではなく、仲間と連携した上での戦闘技能。

味方と連携しての戦闘時にステータスが上昇し、最適な行動を取れるようになる。

・ 軍略

一対一の戦闘ではなく、多人数を動員した戦場における戦術的直感力。

自らの対軍宝具の行使や、逆に相手の対軍宝具に対処する場合に有利な補正が与えられる。

・ ???

キャスター？の持つ特殊能力スキル。

〈所有宝具〉

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

詳細不明

不明

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

由来：？

詳細不明

【解説】

二人目のキャスター。

緑と黒で真のキャスターを巡る争いが起こるとかは多分無い。
適性はキャスターのみ。

小ネタ集

【もしライダーが乱入していたら】

ライダー「ぽよおおおおい！」

チルドオオオン!!!

もくもく…

セイバー「な、何だ？」

ランサー「新手か…！」

(砂煙が晴れる)

ライダー「ぽよっ！」

ランサー「カービイか…」

セイバー「カービイ…だな…」

神奈『カービイ…よね』

勇馬『カービイだな…』

((毛虫…用意しなげや…))

ライダー「ぽよっ?!?!」ナンカイヤナヨカント
?!?!?!

【紛らわしい】

『六話 騎士』のその後

神奈「え、弓を使うサーヴァントが乱入!？」

神奈「え、言うことはこの白いのキャスターなの!?まさか!？」

神奈「え、弓使つて剣背負つておいてキャスター!?分かるか!!!」

ランサー『どうしたんだ、マスター!マスター?マスターアアアア

!!!???

【紛らわしい2】

アーチャー「剣背負つて、弓使うサーヴァントがキャスターとかないわ。紛らわしい」

神奈「弓使つて、剣背負つてるサーヴァントがキャスターとかないわ。紛らわしいのよ」

キャスター「酷いなあ…、マスターからも何か言ってやって?」

正裕「剣背負ってるキャスターとかないわ。紛らわしい」

キャスター「マスターまで!!」

正裕「いや、俺だけは言う権利あると思うよまじで」ヌカヨロビサセヤガツテ…

キャスター「酷い!!!」

【そういえば白い魔王って言うて普通はこの人だよね】

『二話 魔王』より

「誰か……誰か……」

救いを求める。

「神様仏様神様仏様神様仏様……」

助けを求める言葉を震えた口で呟きながら彼女は考える。

(もし自分を救ってくれるなら——)

例えば悪魔でも、魔王でも構わない。

そう念じたとき変化は訪れた。

彼女の目の前、化け物との間に立ちはだかるかのように突風が渦巻き、まばゆい輝きが迸る。

そのあまりの勢いに彼女は後ろに吹き飛ばされた。

風と光は十秒ほど荒れ狂った後、ゆっくりと勢いを失い収まっていた。

「な、何……?」

吹き飛ばされたあとどうにか顔をあげた彼女が見たものは、白いワンピースを着て茶色い髪をツインテールにした少女の背中だった。

彼は美奈に振り返ることも無く手にした杖を怪物に向けると、

「シューター」

杖の先から桃色の光弾を放ち異形の化け物を撃ち抜いた。

「うぎよおおおおお」

奇怪な断末魔をあげて怪物が地面に沈むと、少女は軽やかに美奈へと振り向いた。

「はじめまして！私はアーチャーのサーヴァント、高町なのは！貴女が私を呼んだマスターさん？」

満面の笑みを浮かべながら尋ねる少女を前にして、白山美奈は意識を手放した。

二章

一話 魔術師

「さて、まずは何から話そうか」

駅前のビジネスホテルの一室で、正裕と美奈は向かい合って座っていた。間にあるミニテーブルには、それぞれペットボトル飲料が置かれている。そしてサーヴァント二人はそれぞれのマスターの後ろに控えていた。

アサシンの撤退後、正裕達は話し合う場として駅前のホテルに部屋を取り、そこで今後の話をする事になった。アーチャーが正裕の抑えていた飯の拠点に行くことも美奈の部屋に案内する事も拒んだのである。まあ相手の拠点に足を運ぶのも、自分の拠点に足を運ばれるのもどちらにも障りがあるのは正裕としても承知しているので特に言い争う事もなく、適当な場所を別に用意することになった。それが今いるビジネスホテルの一室である。ちなみに部屋はダブルだが、お二人様としては安いから選択しただけであり決してよこしまな思惑があるわけではない。使うつもりが無いがゆえの選択であった。

ちなみに正裕はもうローブを脱いでいる。容姿を隠していたのはあの場で他の陣営に姿を晒すのを避けるためであり、アーチャーが使い魔を追い払った以上隠蔽は不要だったからだ。

「まずそうだな、自己紹介からしうか。俺は小野正裕、魔術師だ」

「私は白山美奈、大学生です」

「さて、美奈さんは魔術師じゃないんだよな？」

自己紹介が済むと、正裕はすぐに本題を切り出した。

「はい」

そう言っつて美奈はコクリと頷く。

「じゃあ魔術師についてからかな…。魔術師っていうのは魔術っていう神秘を扱う人間だと思ってくれば間違いないかな。西洋の魔術だろうが、陰陽師だろうが、お坊さんだろうがそれが本物の神秘をことうでできるならそれは全部魔術師になる。その辺りは想像できるか

？」

「えーと、マンガとかに出てくる魔法使いみたいな感じですよね？」

問われて尋ね返す美奈に、「あーそうか」と正裕は頭痛をこらえるように額を抑えた。

「まあそのイメージで大體合ってるんだけどさ、魔法って言う表現だけは避けてくれ」

「魔法だとだめなんですか？」

そう言っつて小首を傾げる美奈。

「魔術師の間だと魔術と魔法は違うものなんだよ。難しい説明は避けるけど魔術は他の手段でも同じ結果を出せるもの、魔法っていうのは他の手段とかだと同じ結果すら出せないものって言う感じだな。魔法っていうのは普通の魔術師じゃ使えないものなんだ」

「ええと…？同じ結果？」

説明がよく分からず、困惑を表情に浮かべる美奈。

「そうだな…、例えばライターがあれば火をつけれるよな？」

「はい」

コクリと頷く美奈。

「魔術はライターとか無くても火が起こせる。でもそれは結果としては火を出していることには変わらないだろう？」

「ん？えーと、確かにそうなるのかな？」

話を聞きながら美奈は顔を顰めた。

「こういう、過程は違うけども結果自体は他の手段でも同じものが出るものが魔術。死者の蘇生とか時間旅行みたいな他の手段では実現不可能な事ができるのが魔法って言うことになる」

「んー、つまり不可能を可能にできるのが魔法で、可能なことを魔術で行っているのが魔術って言うこと？」

正裕の説明を聞いてようやく納得がいったのか、ぱん、と手を打ちながら自らの解釈を告げる美奈。

「そう、そういうこと」

それを聞いて「理解してくれたか」と正裕は胸をなでおろした。
「ちなみに」

と、正裕は更に注釈を加える。

「この魔法を使える人は世界に何人もいない。だから絶対に魔法使いという表現は避けてほしい。そんな言葉を言うやつは素人だと思われて付け込まれるからな」

「分かりました」

正裕の忠告をうけ美奈は真剣そのものの面持ちで頷く。

「あと魔術師には一つ絶対に守ってもらわないといけないことがある。それは、神秘の隠匿だ」

「魔術の存在をバラしちやいけないってこと？」

「ああ」

美奈の問いに正裕は頷き、肯定する。

「正確に言えば魔術以外にも神秘全般。例えば幻想種…幻獣とか妖怪とかそういうのかな、の存在とかも明かしたらいけないし、聖杯戦争が行われてるといふことがバレるようなことをしてもいけない」

「え、でもさっきの変態は街中で襲ってきたけど…」

あれはバレないのか、と美奈はその疑問を正裕にぶつけた。

「あそこには人払いの結界が張ってあったからな。魔術の素養が無いやつが迷い込まないようにされてたんだよ。そういうのが使え無いと魔術師として活動するのは難しいし、聖杯戦争なんて以ての外だ」
その答えに美奈はなるほど、と納得した。二人の男性が武器を使つて殺し合いをしていたのだ。金属音などギャンギャンいつているのに通報もなかったのは明らかに異常であった。

と、そこまで考えてふと彼女は思い出す。

「あ、そういえば私。なんか変な怪物に襲われたときに誰も助けに来なかったんだけどそういうのも結界でできるんですか？」

そうアーチャーに助けられたあの日、助けを呼んでも誰も自分に気づかなかったときのことを。

「できるはずだ。ああ、怪物とやらの襲われたのがきつかけでサーヴァントを召喚できたのか」

納得してぽん、と手を打つ正裕。

「どうしてわかったんですか？」

「魔術を知らないのにその怪物とやらをどうにかできるわけ無いだろ。となるとサーヴァントを召喚して助かったとしか考えられない。もしサーヴァントがいるなら、助けを呼ばなくてもサーヴァントに守らせればいいんだからそれ以前には召喚してるわけがないだろ？」

それはぐうの音も出ないほどの正論であった。

「で、神秘の隠匿なんだがな。これをやらないと魔術協会の奴らに殺される事になる。目撃者の方はまあ記憶操作程度で済むことも多いけど場合によっては消されてもおかしくはないな。酷いときには小さな島に住んでた人を皆殺しにしたとか」

そのあまりにも恐ろしい話を聞いて、美奈はぞくりと背筋を震わせる。

「その、魔術協会っていうのは何なんですか？」

おそろおそろと美奈が尋ねる。

「魔術師の共同体だよ。この協会が一番に掲げているのが神秘の隠匿だ。一応所属は自由ってことになるけど、これに関しては所属してようが何だろうが破れば平気で始末しにかかる。それこそ人殺しも辞さない。だからまあ魔術とかについて下手にバラすのはやめておいたほうがいい。周りの人間が死ぬだけだからな」

「う、うん」

いよいよ身体を震わせながら、美奈はぎこちなく頷いた。

「大丈夫か？」

青褪めた顔を俯かせながら身体を震わせている美奈に気遣いの言葉をかけながら、しかし正裕の心中は穏やかではなかった。

(やばい、脅かしすぎた)

今まで平和な日本で危険とも縁遠い中で暮らしていた女性である。そんな相手に、伝えなくてはいけないとはいえ、こんな事を言えば、まあこうなると言うのは当たり前のことであった。

「あー、一旦休憩入れるか。ちよつと外のコンビニで何か買ってくるよ」

気まずげに頭を掻きながら、そう言って正裕は部屋を出た。その後ろに控えていたキャスターも霊体化によって姿を隠して後を追う。

「マスター、大丈夫か？」

気遣わしげに美奈へと声をかけるアーチャー。

「ごめんなさい、少しそつとしておいて」

そんなアーチャーに申し訳なきを感じつつも、美奈はひとり椅子の上で体を震わせていた。

「戻ったぞ」

30分後、右手に下げたコンビニのレジ袋を掲げながら、正裕が部屋に戻ってきた。その袋は大きく膨らんでおり、また左手にも同じような袋があることを見るとかなり買い込んだようである。

「おかえりなさい」

戻ってきた頃に大分持ち直していた美奈がそう言っ、椅子から軽く腰を上げて正裕を迎える。

「ただいま、つと」

テーブルまで近づいて美奈にそう返すと、正裕は手に持ったビニール袋をテーブルの上においた。

「甘い物買ってきたから好きなのを選んでくれ」

そう言いつつ、正裕はビニール袋を漁って中から色々なコンビニスイーツを取り出す。プリンやミニケーキ・コーヒージェリーと言った洋菓子から、饅頭や大福・どら焼きなどの和菓子までミニテーブルの間にどんどん置かれていく。

「あ、ありがとうございます」

ぺこりと頭ををさげた後、美奈は少し楽しそうにお菓子を物色する。

「アーチャーもどうだ？サーヴァントでも食事はできるだろ？」

正裕はそう言っ、アーチャーに薦めるが、アーチャーは渋い顔をして、「毒とか入ってないだろうな」と呟いた。

その言葉を聞いた美奈はピタリと動きを止め、楽しそうにしていた顔からさあつ、と血の気が引き笑顔が引きつる。

「毒……」

美奈は恐ろしい物を見るような目で、手にしていたシュークリーム

をまじまじと見つめた。と、シュークリームが手元から唐突にひたたくられる。

美奈からシュークリームをひたたくった犯人、正裕は無言のままシュークリームを開封するとそれを一口で頬張り、モグモグと咀嚼する。それをミニテーブルに置いたままにしていた自分のペットボトル飲料で流し込むと、ぷはつと息をついて口元を拭う。

「これで、良いのか？」

じろりとアーチャーを睨みつける正裕。アーチャーはその渋面を崩さないまま、正裕を睨み返す。

「悪いな、心配性なんだ」

そう言つてアーチャーはどら焼きを手にとると、包装を手早く剥ぎ取つて齧り付いた。

「うん、大丈夫そうだ」

「納得して貰えてよかったよ」

咀嚼したのち少し表情を緩めてそう漏らすアーチャーを見て、正裕は安堵する。

「じゃあ美奈さんもどうぞ」

「あ、ありがとうございます」

正裕に勧められ、先程大福を取られた時の格好のまま様子をうかがっていた美奈はおずおずとテーブルに手を伸ばした。

「じゃあ、これを貰いますね」

美奈はプリンを手にとると正裕に軽く会釈をした。

「どうぞ」

そう正裕が勧めると美奈はプリンとプラスチックのスプーンを開封し、「いただきます」と言ったのち中身を掬って食べ始めた。

「キャスターも食べるか？」

そう言つて正裕は己の従者にも相伴を勧める。

「ありがとう、マスター」

キャスターはそう笑顔で答えると、興味深そうにテーブルを物色し、大福を手にとった。

「これは何？」

手の中のものを見せながらキャスターは正裕に尋ねる。

「大福だな。皮がもちもちしていて中に甘い餡が入ってる。日本の伝統的なお菓子だ」

「へえ」

説明を聞いて興味深そうに大福を眺めると、キャスターはその包装に戸惑いながらラツピングを剥がして取り出した大福に齧り付いた。

「うん、面白いねこれ」

感心したような声を出すキャスター。

「どうやらお気に召したらしく、笑顔で食べ進めていくキャスターであつた。」

二話 聖杯戦争

「じゃあそろそろ話し合いを始めようか」

お菓子、結局一人につき二つあった、を食べ終えた後、正裕が話を再開すべく切りだした。

「は、はい」

その言葉を受けて美奈はびしっと居住まいを正す。

「さて、魔術師については終わったから聖杯戦争についてだな。聖杯戦争っていうのは聖杯という万能の願望機、つまり願いを叶える杯を奪い合う為の魔術師による戦いだ」

つらつらと聖杯戦争について語り始める正裕。

「この聖杯戦争は普通の魔術師の戦いとは大きく違うところがある。それがサーヴァント、かつて英雄と呼ばれた者達の写し身を使い魔として使役し戦わせることだ。君の後ろにいるアーチャーやこのキャスター、そしてさつき遭遇した：変態みたいな奴や闇討ちしようとしてた奴もそうだな。このサーヴァントを従えている魔術師をマスターと呼ぶ」

「あ、その辺りはアーチャーさんからも聞きました」

話の腰を折る美奈であった。

「二応、一通り話したほうが話の抜けが無くなるから被るかもしれないけど話させて」

「あ、はい」

論すような正裕の言葉を受け、美奈はコクリと頷いた。

「このサーヴァントにはそれぞれクラス、剣士とか魔術師みたいな役割が振り分けられている。これは英雄をそっくりそのままの形で再現するのは難しいからだ。例えば剣も魔法も使える英雄がいても、剣士のクラスだと剣を中心に能力が再現される事になる。魔術師なら魔術を中心に再現されるな」

「なるほど」

説明の合間にコクリと頷きながら相槌を打つ美奈。そんな彼女の頭はもはや聖杯戦争の説明で一杯一杯であった。

「このクラスっていうのは7つある。剣士のクラス・セイバー、槍使いのクラス・ランサー、遠距離攻撃が得意なクラス・アーチャー、乗り物や幻獣等に騎乗して戦うライダー、魔術師のクラス・キャスター、暗殺者のクラス・アサシン、理性を無くした狂戦士のクラス・バーサーカーこの7つだな」

「えーと、セイバー…ランサー…アーチャー…ライダー…キャスター…アサシン…バーサーカーで…7つですね」
「そうだな」

説明を受け、指折り数えながら美奈は復唱する。それを肯定すると、正裕は更に話を続けた。

「さっき言ったアサシンが怖いのは気配遮断が出来るからだな。マスターじゃサーヴァントには敵わないから、気配を消して暗殺してくるアサシンはマスターにとつては天敵なんだ。サーヴァントはマスターからの魔力供給が無いと存在できないから、サーヴァントはマスターを護る必要がある訳だな」

「そうなんですな」

「で、マスターを守りつつ敵のサーヴァントを全滅させれば聖杯戦争は勝利と言う訳だ。勝ったマスター、そしてサーヴァントは聖杯を手に入れて願いを叶える事ができるってわけさ」

「サーヴァントも？」

ふと、説明の中の一言が気になった美奈はつい疑問を口にした。

「当然サーヴァントも願いを叶える為に戦ってる。マスターとサーヴァントなんて名前だけど実際には協力関係と言う事だな。まあそこを主従関係みたいにしてるのが令呪っていうサーヴァントに言う事を聞かせる命令権だな」

そう言っつて袖をまくり右腕に刻まれた紋様、令呪を見せた。

「これが、令呪。君の体にも似たような紋様があるはずだよ。令呪はサーヴァントに対する絶対的な命令権だ。例えば3回まで相手の望まない命令も承諾させる事ができる。例えば自害であってもね。他にもサーヴァントを自分の側に瞬間移動させたり、強化する事もできるから大事に使うといい。ちなみに令呪自体がマスターとしての権

利を表す物だから三回使えば敗北する事になる。使うのは2回までで……、三回目を使うのはは相手を殺さないところらが殺される時に特攻させるか、サーヴアントがこちらを殺そうとした時に自害させるくらいだろうね」

「自害……させる」

令呪について聞いた美奈はそう呟いて、後ろに控えているアーチャーにちらりと目をやった。

彼がこちらを殺そうとして、それを止めるべく自害させると言うことが美奈には想像できなかった。

ましてやアーチャーは美奈の命の恩人なのだ、その彼を殺すと言うのは仮定であっても彼女にとって酷であった。

「まあ、アーチャーは君の事を大事に考えてるみたいだから自害させるなんて事はなさそうだけどね。と言うか脅かしちゃったけどそうそうサーヴアントを自害させる事は無いみたいだから」

美奈の心中を見透かしてか、正裕は美奈を安心させるように穏やかな笑みを浮かべながら柔らかく声をかける。

「…はい」

その気遣いが嬉しくて涙を流しそうになる自分を抑えながら、美奈は小さく呟いた。

「えーと、じゃあ次の話に移るよ」

「はいー」

頬を搔いて照れくさそうに少し顔を背けつつも視線をこちらに向けてくる正裕に微笑まじさを感じながら、美奈は笑顔を浮かべて力強く返事をした。

三話 決意、そして同盟締結

「さてサーヴァント何だけど、彼らはそれぞれに切り札を持っている。それが宝具と言うものだ」

「ほうぐ？」

聞き慣れない言葉を聞いて、美奈は鸚鵡返しにその言葉を口にした。

「そう、宝具。ノーブルファンタズムとも呼ぶな。宝具って言うのは、英雄達のいわゆる伝説の象徴が形になったものかな。伝説の聖剣とか、名馬だとか、あるいは超人的な肉体なんてのもある」

「アーサー王のエクスカリバーみたいなもの？」

「そんな感じだな」

宝具の説明を聞いた美奈の挙げた例の正しさに、正裕のは満足そうに頷いた。

「宝具はそれぞれの逸話に基づいた能力を持っている。そしてそれらの能力には2つのタイプがある。常時発動型と真名解放型だ」

「常時発動はなんとなくわかるけど…、真名解放って？」

「または美奈の知らない単語であった。」

「常時発動型は普段からその能力が発揮されてるタイプだな。不死身の体とかその武器につけられた傷が治らないみたいな能力が代表的かな。そして真名解放型は真名…宝具の名前を詠唱して発動するタイプだ」

「えーと、例えば『エクスカリバー！』とか叫ぶってこと…？」

「そんな感じ」

（うわあ…）

躊躇いがちに尋ねた問に対する正裕の肯定に、美奈は心の中で軽く引いた。何ていうか恥ずかしい感じがしたのである。

「真名解放型の宝具は大体一発で戦局をひっくり返せるくらいの力がある事が多い。例えばさっきから言ってる『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』なんてまともに当たれば一発で相手サーヴァントを倒せるだけの攻撃を撃てるらしいしな」

「じゃあ宝具の真名解放だけしてれば勝てるって事になりませんか？」

美奈が浮かべた素朴な疑問を、しかし正裕は頭を振って否定した。「確かにその可能性はあるけどね。大抵はそれだけじゃ終わらないことが多い。相手だって同じような宝具を持っていたりするし、何より真名解放型には問題も多い」

「問題？」

小首を傾げる美奈。

「まず魔力を大量に使うこと。つまり乱発はできないってことだな。あとは真名……宝具じゃなくてサーヴァントの方だな、要するにサーヴァントの正体がばれる」

「どういう事？」

「宝具は英雄の伝説の象徴だ。つまり宝具の名前から英雄の正体がかかってしまう。例えばエクスカリバーを使う英雄だからアーサー王みたいな感じだな。更に正体がバレると能力も分かる。何せ英雄の活躍は伝説に記されているからな。使う武器に戦い方、場合によっては弱点が分かる事まである」

「ああ、なるほど」

美奈は納得してぽんと手を打った。

「だから真名解放は最後の切り札程度に考えておかないと駄目なんだ。まあだからアーチャーの正体とか宝具が分かってもそれを軽々しく口にしないほうがいい」

「分かりました」

そう言つて、美奈は後ろに控えているアーチャーの正体に思いを馳せる。彼がどんな英雄でどんな過去を辿ってきたのか。そして、何を願う聖杯を求めているのか。

(あとで、聞いてみよう)

そう考える美奈であった。

「えーと、あと話すべきことは……。あ、そうだ」

その前で話すべき内容を考えている正裕を意識の端に追いやりながら。

「さて、説明を聞いてどう？聖杯戦争を戦う気はある？」

その後、聖杯戦争の大雑把な取り決めや教会についてなどを話した後で正裕は美奈へ切り出した。

「私は…」

真つ直ぐに見つめてくる正裕の眼差しから、美奈は思わず視線をそらしたくなる。

「私は…」

しかし、そらす訳にはいかなかった。この意思だけは逃げることなく伝えなければいけないと、美奈がそう感じたから。

「私は、聖杯戦争に参加します」

しっかりと視線を合わせながら、つつかえることも無いまま美奈は己の決意を宣言した。

「私はこの人に助けて貰ったから、だからここで逃げてこの人の願いを潰すような事はしたくないからだから。私は、聖杯戦争を、戦う」それは彼女の精一杯の決意の表現であった。

「そうか…」

その決意表明を受けて正裕は少し残念そうに漏らす。

「じゃあ次だけど、君はどちらとの同盟を受ける気はある？」

「一つ聞きたいんだが」

その問に対して質問を返したのは美奈ではなく彼女のサーヴァントであるアーチャーである。

「同盟を組めば確かにこっちはメリットがある。何せこっちは魔術師未満のマスターだ、半人前以下だと言っても良い。同盟を組むことでフォローしてもらえるならこっちとしては助かる。だけど、そちらのメリットは何だ？何を考えてこちらとの同盟の望んでいるんだ？」

感情を消して正裕を見つめるアーチャー。その言葉と表情の奥には正裕による裏切りへの警戒がある。

「メリットはいくつかある」

だからこそ正裕は堂々と話し始めた。私心など無いのだと、その心配は杞憂であるのだとそう伝えるように。

「まず、サーヴァント二人が組めば勝てる確率は間違いなく上がる。

何せサーヴァントは七人、その3分の1近くがひとつにまとまるなら勝率は大きく上がる。そして、半人前のマスターの動きをコントロールできる。これは自分の思うようにする為ではなくて、下手な事をし聖杯戦争が続けられなくなる事を避けるためだな。あとここまで教えておいて、放り投げるのも後味悪いしな」

アーチャーは表情を変えない。そう、ここまでは普通の話。アーチャーの感情を動かすには足りない。だからこそ正裕はここであって普通ではない話を口にする。

「そして最後、聖杯を求めるなら同盟を組んでいた相手とも潰しあわなきゃいけないが、それが半人前のマスターとそのサーヴァントなら勝てる確率が高い。要するにだ俺は俺達の勝利のために同盟を組もうと言っている」

あまりにも傲慢で自分本位な宣言。それを聞いた美奈は啞然として口を開き、アーチャーは眉をひそめ、正裕のサーヴァントであるキャスターまでもが呆然としていた。

「つまり」

怒気を孕んだ声が響く。

「俺達を利用して捨てるために同盟を組むと？」

「捨てるなんてとんでもない。最後に勝つか負けるかなんて所詮は実力次第さ。悔しいのならお前たちが勝てば良いだけだろう」

殺気すら滲ませたアーチャーの問い掛け。それを前にして正裕は飄々と答えてみせた。

「それに、利用するのはお互い様だろう。そちらは俺達に助けをもらう、そしてこちらはそちらと組んで最後の戦いまで確実に駒を進める。そちらも一緒にだ。捨てるなんて的外れもいいところだろうよ」
にやりと不敵に笑ってみせる正裕。

それを受けてアーチャーは

「はははは、なるほどそりやそうだ」

心底おかしそうに笑いだした。

「確かに最後に俺が勝てばいい、それだけの話だ。利用するのもお互い様だし、最後まで進めるのはこちらと同じか。そりやあその通り

だ、はははは」

そう言つて笑い続けるアーチャーを誰もが啞然として眺めていた。そうしてひとしきり笑ったあと、アーチャーは居住まいを正して言った。

「マスター、この同盟受けよう」

「いいの？」

散々同盟に反対していたはずのアーチャーによる提案に思わず問い返す美奈。

「変に取り繕おうとしない物言いも気に入ったにし、何よりサーヴァント相手にこれだけの啖呵を切れるやつはいない。いい同盟相手になるよ」

そう言つてニヤリと笑うアーチャー。

「それじゃあ同盟を受けてくれるのか？」

「ただし」

思わず表情を明るくする正裕。そんな正裕の出鼻を挫く様にアーチャーはびしやりと言いつつ放つ。

「ただし？」

思わず身構える正裕。その様子に満足したのかアーチャーは笑みを浮かべながら言った。

「もし俺が消えてもマスターを殺すような真似はするなよ」

「ああ、もちろんだ」

力強く宣言した正裕は更に続けて、

「そつちもキャスターが消えた時は頼むぞ」

冗談ぽく笑いながらそういつた。

アーチャーは呆気に取りられてしばらくは固まった後、

「任せてくれ」

そう言つてそれを請け負つたのだつた。

斯くして、緑の勇者と白い魔王の2つの陣営はここに同盟を締結したのである。

四話 メイドがいた

「疲れたー……」

そう愚痴りながら美奈は自宅に帰るなり玄関の上がり框に腰掛けた。時刻は夜の三時、夜明けも近い時間である。

あ後は連絡先を交換して、ホテルで現地解散となった。

「あー、そっか電気つけっぱなしかー」

電灯が煌々と輝く玄関と廊下を眺めながらひとりごちる。家を出た時は突然アーチャーに抱えられて窓から出た為に、電気を消す暇などなかったのである。

ちなみにそのアーチャーは美奈の側で霊体化して控えていた。霊体化すると魔力消費が抑えられるし姿を隠せる為である。

と、寛いでいた美奈の後ろから物音が聞こえた。

美奈は慌てて立ち上がると、振り向いて廊下の先を

見る。その目線の先には自室への扉があり、その向こう側からがたんがたん物音が聞こえている。

そういえば、と美奈は思い出す。美奈はあの変態サーヴァントかその仲間だかに追い立てられる様な形で部屋を出たのである。ならば、奴らがこの部屋にいてもおかしくはない。

「アーチャー……、中に何かいる」

小さく、側に控えているはずのサーヴァントに声をかける。

すぐさま実体化したアーチャーは美奈を庇うように彼女の前で身構えた。

そんな中、廊下の先からはガチャリという音とともにドアノブが回転し、

遂に扉が開かれた。

ぱつ、と部屋から飛び出してくる人影。それは北欧系の顔の青みがかつた髪をショートカットにした女性だ。黒いワンピースに白いエプロンドレス、そして頭にはフリルの付いたヘッドドレス。いわゆる

メイド服、それもミニスカメイド、を身に纏ったその女性は優雅にお辞儀をすると、にこやかに笑みを浮かべて言った。

「おかえりなさいませ、ご主人様とご主人様のマスター」

「え……」

それを聞いて美奈は思わず呆けてしまう。

（ご主人様と……、ご主人様のマスター？）

ここに居るのは二人だけで、マスターと言うのは美奈であろう。つまり、『ご主人様』と言うのは……

美奈は一步前になると、メイド服の女性とアーチャーの顔を見比べる。

美奈に見られたアーチャーは実にバツが悪そうにこう言った。

「ごめん、あれ俺の使い魔だ。置いてきたのをすっかり忘れてた」

そのなんとも間の抜けた言葉に美奈の緊張の糸が切れる。

「脅かさないですよ」

ふう、とため息をついて美奈は緊張のあまりいからせていた肩をおろした。

「まあまあ、とりあえず中に入りませんか？」

にこやかに美奈達を促すメイドの女性。

「ここ私の部屋なんだけどなあ……」

まるで自分の部屋であるかのような女性の言葉にため息をつきながら、美奈は勝手知ったる我が家に足を踏み入れるのだった。

五話 彼女の名は

「おお？」

部屋に入ったとき、美奈は驚きと戸惑いの余りそんな声を漏らした。

「何かきれいになってる？」

そう、部屋がきれいになっていたのである。

部屋の中央にあったミニテーブルの上にはリモコンや雑誌等が整頓された状態で置いてあり、ベッドの上は寝間着や寝具がきれいに折り畳まれていた。多少の汚れがあったはずの床や棚の上も軒並み掃除されている。唯一課題のやりっぱなしで汚れている机の上はそのままにしてあったが、それは作業中のものを下手に触ってはいけないだろうという配慮が伺えた。

「僭越ではございますが、お部屋を掃除させて頂きました。お気に召しましたでしょうか？」

そう言つて会釈をするメイド姿の女性。

「え、あのありがとうございます」

「お役に立てて光栄でございます、マスター様」

たじろぎつつも美奈が礼を述べるとメイドはニコリと笑った。

「ところで」

どこか和やかだったその空気はしかし、アーチャーの真剣味のある一言で引き締められた。

「この部屋には誰か来たか？」

アーチャーの問に、メイドはしばし顎に指をつけて黙考する。

「魔術師が一人に使い魔が3体来ました。まあ、一人残らず蹴り出しましたが」

「そうか」

報告を聞いて鷹揚に頷くアーチャーを尻目に美奈はメイドを見つめていた。

メイドの体格は有り体に言えばスリムであった。モデル体型とも言おうか、美奈にはスラツとしたその体と「敵を蹴り出す」という

言葉がどうしても結びつかなかった。

「蹴り出した…」

その細い体にどれだけの力があるのか、などと考えながら美奈は視線を脚に下ろす。それに気付いたのか、メイドは脚を見せるようにスカートの裾を軽く摘んで一礼した。

「私、こう見えても脚技は得意でして」

「あ、ごめんなさいぶしつけに」

見ている事を気付かれ、美奈は慌ててメイドに謝罪した。

「いえ、お気になさらず」

そう言つて笑顔で謝罪を受け入れるメイド。

「こいつはそれなりに強いぞ。サーヴァント相手じゃなきやどうにかなるくらいにはな」

「へえ、そうなんだ」

アーチャーの補足を受け、感心したような声を上げる美奈。

そして、ふとメイドの名前を知らないことに思い至った。

「そういえば、あなたはなんて名前なの？」

その問いに、メイドの女性は困惑顔になった。

「名前——、何でしょうねえ？」

一見とぼけた様な言葉。しかしその口調と表情は真剣そのものであった。

「もしかしてわからないってこと？記憶喪失とか？」

「いえ、本当に無いのです」

少し申し訳なさそうにしながら返答するメイド。その言葉に美奈は衝撃を覚えた。名前というあつて当たり前のモノが無い、というのが信じられなかったが故に。

「そいつらに固有の名前は無いんだ。種族としての名前ならあるけど、個体を識別するための名前は無い」

そうアーチャーが横から補足する。

「どうして？貴方の使い魔何でしょ、名前とかつけてあげなかったの？」

アーチャーを責めるように睨む美奈。その視線を受けて、アー

チャーは居心地が悪そうに視線をそらした。

「使い魔、というか厳密には俺の能力の一部でもあるんだ。自分の一部に名前をつけるような事はしないだろ」

「でも…」

アーチャーの言い分に反論しようとして、しかしできないまま美奈は言葉をつまらせた。

「じゃあ、今だけでもつけてあげれない？」

美奈のせめてもの頼みを受け、アーチャーは少し首をひねる。そして、

「じゃあ、プロピ―はどうだ」

そう言つて、メイドに名前をつけた。

「なんか、プロビ―（新米）みたいなのですが…。まあ、ありがとうございます」

つけられたその名前へメイド改めプロピ―は少し不服そうに、でも確かにアーチャーに礼を述べたのだった。

六話 魔王と呼ばれたもの

「話がそれだな、ここの守りなんだけどどうだ？」

名前を付けたあと、アーチャーは顔を少し顰めながらプロピーに尋ねた。

「どう、とは？」

アーチャーからの質問を受けてプロピーが問い返す。

「お前一人でここを守るかどうかだ」

アーチャーの返答を受けてプロピーは顎に手をやり黙考し、やがて顔を上げて答えた。

「厳しいですね。今回はドアからのみでしたし少数でしたが、さらに多い戦力でドアや窓から入られれば対処できません。できればもう少し戦力がほしいです。それこそサーヴァントに食い下がれる程度にあれば理想的ですね」

「そうか、わかったありがとう」

その要望を聞いて、アーチャーはしばし考えた後、美奈の方へと向き直った。

「マスター、このアパートを俺の領域として固定したいんだけどいいかな？」

「領域？ 結界みたいなもの？」

提案を受けた美奈はそう尋ね返した。

「まあそんな感じだな」

「アーチャーの領域にすると何ができるの？」

美奈が更に具体的な内容について問い質す。

「俺が活動しやすくなる。そのままだと制限がある使い魔も使えるし、領域内の状況もわかるから不意打ちも防ぎやすくなるな」

アーチャーの告げたその内容はまさにいいこと尽くめであった。

「じゃあ、お願いしていい？」

それならば、と美奈は許可を出す。

「それじゃあ行くぞ」

許可を得たアーチャーはそう言って片膝をつくと、右手を軽く上に

挙げる。その対面にいた美奈はその手に『目に見えない何か』が集まるのを感じていた。

(ああ、これが魔力なんだ)

美奈がそんな感慨に浸っていると、それが禍々しきすら覚える不快なものに変化する。そしてアーチャーはそれを床に叩きつけるようにして振り下ろした。

『混沌なる——(キャツスル)——』

「ちよと、まつ——、うっ…ぐっ…」

美奈が慌てて引き止めるその寸前に宝具が発動し、美奈は苦しみのあまりその場でうずくまった。

「で、説明してほしいんだけど」

部屋の中で仁王立ちした美奈は、その前に正座しているアーチャーを睨みつけていた。ちなみにプロピールはいない、彼女はアーチャーが既に魔力に還していた。

「その、ごめんさい。あれが一般人には毒だって忘れてました」

恐縮のあまりアーチャーの返答は敬語であった。

「忘れごことが多いのね…」

呆れたような美奈の冷めきった声音に、アーチャーは首をすくめる。

「まあ、いいけど。とりあえず今のやり方は無しってことで別の方法を考えないとね」

ため息を吐きながら、前向きな意思を見せる美奈。

取り敢えず赦されたらしい事に安堵しながら、アーチャーはそつと提言した。

「あの、多分影響は抑える様にできると思うんだけど…」

「はじめから、やりなさい」

「うっ」

美奈にぴしやりと言われて再び恐縮するアーチャーであった。

「これでいいかな？」

領域の調整を終えたアーチャーが美奈に確認した。

「んー、良いんじゃない？」

先程の件で魔力を感じれるようになった美奈が周囲の魔力を探ったあとでそう返答した。結局アーチャーの宝具の影響は注意深く探れば違和感を感じる程度に抑えられていた。

「ふう良かった…」

美奈からの承認を受けたアーチャーはほつと胸をなでおろした。

「そう言えばさつき使ったのって宝具なのよね？」

「そうだよ」

美奈の問をアーチャーは肯定する。

「その…宝具の真名に聞き覚えがあったんだけど…、あれって何かの魔王の別名じゃなかったけ？確か、何十年かに一度蘇るとかい…」

（ああ、またか…）

恐る恐る尋ねる美奈。そんなマスターの様子に少しの寂寥感を覚え、アーチャーは「はあ」とため息を一つつくとそれについて説明すべく口を開いた。

「確かに俺は生前魔王なんて呼ばれる存在だった。でも俺自身は魔王らしいことはしていないし、する気もない」

「そうなの？」

予想とは違う返答に美奈の顔から僅かに怯えが消える。

「でも、伝説だとそんな感じじゃなさそうだけど」

美奈が聞いた伝説において、その魔王は世の人々に恐怖と絶望を撒き散らす存在であったという。それについて確認すると、

「それは俺の前に魔王だったやつだな」

そんな返答が帰ってきた。

「前？」

「俺は魔王が転生した人間だったんだ。俺が生まれる少し前に魔王が滅ぼされたんだけど、魔王の力自体は世界に残った。そしてそれを受け継ぐ器になったのが俺だ。でも俺自体は魔王なんかになんたくな

かったから力はほとんど使わなかったんだ」

彼は確かに魔王であったがそれを望まなかった。それ故に彼は英雄なのだ。魔王を己の中に秘めたまま世に出さず、魔王の復活を望む人間を退けた彼は、魔王でありながら反英霊ではない特異な英霊であった。

「ごめんなさい、私貴方を疑ってた」

それを聞いた美奈はアーチャーへ謝罪した。

彼女はアーチャーを疑っていた。魔王である彼は本当は悪人で、自分を騙して聖杯を手に入れようとしていたのではないかと。

「仕方ないさ、そもそも教えてなかった俺が悪いんだし」

そう言って、彼は美奈へと手を差し出した。

「そう言えばちゃんと自己紹介できてなかったな。俺はアーチャーのサーヴァント、真名は——だ。これからよろしくマスター」

「私は白山美奈。よろしくね、アーチャー」

美奈はそう言って笑顔を浮かべると、力強くその手を取った。

差し込む朝日が、手を繋いで見つめ合う二人の姿を照らし出していた。まるで二人の門出を祝福する様に。

「ところで貴方の真名に聞きおぼえがないんだけど…」

「ああ、それは…」

彼らの話はもう少し続きそうであった

七話 初戦を終えて

セイバーとランサーの交戦を上空から偵察した後に帰還してきたライダーを前に、しゃがみ込んでその顔を眺めながらライダーのマスクであるフォリオは彼から話を聴き取っていた。しかし、

「ぽーよ？」

きよとんとした顔で、身体をかしげるライダー。聴き取りは遅々として進んでいなかった。

そもそも片言しか喋れず幼児並みの知能しか持たないライダーである。どんな質問をしても先程のような反応しか帰ってこないのであれば聞き取りは無駄であった。

フォリオはライダーの知覚を横取りして映像や音声の情報は抑えている。この聴取は英霊として戦士としての見分を欲していたが故であった。

「はぁ」

半ば予想していたこととはいえ、その現実にはげんなりしてため息をつくフォリオ。

「じゃあ最後に聞けど。お前はアイツラに勝てそうか？」

「ぽよっ！」

これなら流石に答えられるだろうと期待したその質問、それに対してライダーは元気よく右手を上げて答えた。どことなく顔つきもキリツとしているその姿は幼稚園ならはなまるを貰えそうである。ここは幼稚園でもなく、ましてや目の前にいるのは園児などではなくサーヴァントという英霊の写し身なのであるが。

「……まあ、勝てるのならいいか」

その姿に毒気を抜かれたのか、フォリオは呆れたように表情を崩すと部屋に置いてあるベッドに飛び込んだ。流石に今夜はこれ以上の戦闘は起きないだろうと考えてのことである。そして何より彼は異様に気疲れしていたのだった。

「くそつ、あのキャスターめ！」

彼、荒見冬馬は怒り狂っていた。

彼はバーサーカーのマスターである。風宮市において聖杯戦争が開催されるに当たり協力者として招かれた彼は、しかし思うように進まぬ戦況に腹を立てていた。

必勝を期したはずの召喚は失敗し、キャスターに横入りされてアーチャーの始末はできず、結果的に貴重な魔力を浪費したのみである。

また、怒りの捌け口になる対象がないことも彼の鬱憤を加速度的に溜めさせていた。彼の鬱憤の原因となるサーヴァントはバーサーカーである、理性の無い彼に下手に当たり散らせばどのような反応を返してくるかわからない。最悪襲い掛かってくることも考えられ、そんなことで令呪を使うのは無駄遣いもいいところであった。

「くそ、魔力を補填するしかないか」

椅子に荒々しく腰掛けながら、冬馬は苦々しく吐き捨てる。とにかく魔力が足りなければどうしようもない。そう考えた冬馬は使い魔に市井からの魔力の徴収を指示するのだった。

その判断が彼に更なる波乱を呼ぶことを知らないぬままに。

「ランサー、セイバーと戦ってみてどうだった？」

神奈が間借りするマンション一室で、神奈はランサーから交戦への意見を求めていた。

「そうだな……、流石に最優のサーヴァントと言われるだけのことはあると感じたな。マスターはステータスを見れたのだろうか？ どうだったあのセイバーは」

所感を軽く述べた後、ランサーはマスターへと問いを返した。

マスターにはサーヴァントのほしいの強さを見る事のできる透視眼を与えられる。それを使えば、筋力や敏捷といったステータスを大まかに見透せるのである。

「そうね…、ランサーより弱いくらいじゃなかったかしら」

ランサーの視界越しに見えたセイバーのステータスを思い返しなから神奈は漏らす。

ランサーはそれを聞いて「やはりか」と呟き、顎に手をやり考え込む。

「マスター、多分セイバーには何かある。実際に戦ってみてわかったが、奴はセイバーにしてはステータスが異様に低い。何かしらのハンデを背負ってるのか、もしくは宝具による代償でもあるのかどちらかだろうか」

「宝具による代償、つまりその分強力な宝具を所持しているということ？」

ライダーの推測を受け、神奈はその意味することを悟った。

強大な力は時として持ち主に何かしらの代償を強いる事がある。聖杯戦争で代表的なのはバーサーカークラスの狂化スキルであろうか。サーヴァントのステータスを上昇させる代わりに理性を奪うという呪いじみたスキルである。それと同じような代償の代わりに何かを授ける伝説など枚挙に暇がない。今回の場合は力を奪われているが、その分のリターンがあるはずであった。

「あと、さっきのセイバーは代償だけ支払ってリターンを得ていないようにも見えたな。終始戦いづらそうにしていたし、代償を支払わせる様な類のものももっていないさそうだった。あの剣がそうだったのかもしれないが多分違うだろうな。あれは代償を求めるような魔剣とは違う、俺の見立てでは聖剣よりだ。生前にはどちらにも縁があったからな、何となくだがその辺は分かる」

「なんですって?」

ランサーのその言葉に神奈は怪訝そうに顔を歪ませた。

ランサーの推測通りならセイバーはただ自分を弱くしただけである。なぜそんな事をするのか神奈には考えつかなかったのである。

「多分、様子見だろうな。初戦から全力を出すサーヴァントはいない、そう高を括って俺達をまんまと実験台に使った訳だ。俺自身全ての手札を見せたわけじゃないが何とも大胆なことをする奴だ」

そう忌々しそうに吐き捨てるランサー。

今までの堂々とした態度を崩して感情を顕にするその姿を見て、神奈はふと心細くなった。

「勝てるの？」

不安げに尋ねる神奈。その姿を見て、ランサーはその不安を吹き飛ばす様に不敵に笑ってみせる。

「安心しろ、マスター。マスターの実力不足による能力低下の可能性だってある、俺の予想が全てでは無いだろう。それに切り札を伏せているのはお互い様だ。ならば俺がこの槍を以て切り札ごと相手を蹴散らしてしまえばいいだけの事さ」

堂々と宣言するランサー。その言葉に勇気づけられ、神奈の眼に力が戻る。

「頼りしてるわよ、ランサー」

「フツ、まかせておけ」

神奈の言葉を、ランサーは気障に笑って返した。

八話 凶報

「魂喰いか」

拠点として間借りしているウィークリーマンションの一室で、朝食を摂りながらローカルニュースを見ていた小野正裕はポツリとつぶやいた。

最近風宮市の街中で意識不明になる人間が多く出ている。そのニュースを見たとき、正裕は即座にその原因と思しきものに思い当たった。

魂喰い。それはその土地に住まう無辜の人々の魔力を食らい、サーヴァントの力に変える行為である。サーヴァントは魔術師の魔力を大量に消費する。加えて宝具を解放するとなれば更に甚大な量の魔力を持っていかれるのである。それをカバーする為に行われるのが魂喰いであった。しかし魂喰いを行うと世間に異常が漏れ、最悪の場合魔術の存在が世間に露見してしまう。故に魂喰いをやりすぎれば聖杯戦争を管理する教会や魔術師の組織である魔術協会から狙われる羽目になる。制裁の理由に人を襲う事に関する禁忌が無いのは正裕としてはやや不愉快だが、最終的に下手人が排除されれば問題はあまるまい。

「普通の聖杯戦争だと、まあキャスターが犯人であることが多いんだけど」

そう漏らしながら、正裕は手にしたカップを傾ける。

キャスターは絡め手を得意とするサーヴァントが多く、魔術を得意とするだけはあり魂喰いに適性のあるサーヴァントが多い。そもそも英霊達はこの手の無辜の民を犠牲にするのを嫌う事が多いが、キャスターは魔術師のクラスだけあって変わり者も多い上、そもそも魔術師である為にその手の倫理観が抜けている事もあるようだ。

「疑われるのは癪だよなあ」

そう言って正裕はため息をつく。

今回キャスターを召喚しているのは正裕であり、それはすなわち疑惑の中心にあるという事でもある。そして正裕は魂喰いをやってい

ないし、サーヴァントが隠れて魂喰いをしているという疑念もなかった。彼がサーヴァントとして従えているのは国一つを救った英雄であり、善性の象徴とも言える英霊である。魂喰いを指示したらむしろ反旗を翻されてもおかしく無い。それは、この数日の彼との交流を通して何となく察していることであつた。

しかし、そうなるかどうかの陣営の仕業なのか。

「バーサーカーかな」

バーサーカーはとりわけ膨大な魔力消費を要求するクラスである。魔力不足を補うべく魂喰いを行うのは自然だ、そして何よりマスターでもなかった美奈が襲われたという話とその後バーサーカーと戦っていた事を鑑みればバーサーカー陣営が一般人を襲って魂喰いを行っていたという推測が成り立つ。

「二応確認は取るか」

そう言つて食卓を立つと、正裕は美奈のところへ向かうべく身支度を整え始めた。

九話 訪問と確認

昼を少し過ぎた頃、正裕は住宅街の一角に立っていた。

「ここ、だな」

美奈から教えられた住所と、目の前にあるアパートのプレートに書かれた名前を眺めて正裕はそこが目的地であると確信した。

そしていざ乗り込もうとその小さなアパートの敷地へ踏み込もうとしたその刹那、キャスターからの念話が頭に響く。

「待つて、マスター。そこは何かおかしい」

緊張感に満ちた警告。それを聞いた正裕はそこでようやく目の前にある結界らしきものに気がついた。

「まさか」

美奈は魔術師ではないので結界は張れない。ならば、誰がそれを張るのか。候補は2つ、アーチャーかもしく敵対するマスターが人払いのために張ったのか。

「キャスター、様子を見てきてくれ！」

敵が中にいるのならばマスターがこのこ乗り込むのは危険である。そう判断した正裕はキャスターに斥候を命じた。

「了解！」

それを受けたキャスターは霊体化したままアパートに飛び込む。正裕もまたいつでも戦闘を開始できるように携行した物品を確認するように意識を巡らせ、その後周囲を警戒した。

しばらくした後、キャスターが正裕のもとに戻ってきた。

「マスター、大丈夫だ。これはアーチャーの張ったものらしい」

そんなキャスターの報告を受けて、正裕は警戒を緩める。

「そうかそれは良かった」

そう呟き、正裕は改めてアパートへと足を踏み入れるのであった。

「こんにちは、正裕さん」

教えられていた部屋をノックするとガチャリとドアが内側へと開き、中から美奈が笑顔で正裕を出迎えた。

「済まないな、突然」

「いえいえ、大丈夫ですよ」

昨日の今日で突然押しかけてしまった事を正裕が詫びると、美奈はそれを笑顔で制した。

「取り敢えず上がってください」

そう言って美奈はドアを更にかけて、正裕を中に入る様に促す。

「ああ、ありがとう」

正裕は微笑を浮かべるとその招きに応じて美奈の住まいへと上がり込んだ。

ワンルールの自室へと招くと、美奈は部屋の中央においてあるローテーブルへ正裕を誘う。

促されるままに正裕がローテーブルの前へと座ると、その正面に美奈が座った。

「あ、お茶とか飲みますか？」

「いや、いいよ。あまり長居する気もないし」

美奈からの勧めを、しかし正裕は礼をしつつも断る。

「そうですか。それで、どうしてこちらに？」

断られた事に少し気落ちしながら、美奈は正裕へ話を促した。

「いや、少し聞きたいことがあってな。最近この辺りで意識不明者が出ているというのは知っているか？」

「あ、なんかニュースになっていますね。原因は不明なんですっけ」

正裕の問を聞いて最近風宮市を騒がせてるニュースに思い当たった美奈はそれを口にした。

「それが魔術師、というか他のマスターの仕業の可能性がある」

「え!？」

正裕のその言葉に美奈は驚いた。

「魔術師ってそういうのは隠れてやるんじゃないんですか？」

「魔術師は神秘を秘匿しなければならない」その原則について散々脅された美奈である。それはそんな彼女には当然の疑問であった。

「隠れてやって、それが表に出たんだろうな」

呆れたようにため息をつく正裕。そうしたのち、正裕は姿勢を正すと本題を切り出した。

「それで君がサーヴァントを召喚した時に襲われたという化物なんだけど、こいつが魂喰いをやらかしてると思うんだ。一般人だった君を襲うなんてそれくらいしか考えられないしね。だから、そいつについての情報がほしいんだ。俺の予想だとバーサーカーのマスターの使い魔だとは思うんだが…」

「実は私もそういうのは分からないですよね」

そう言つて申し訳無さそうに眉根を寄せる美奈。その傍らに突如アーチャーが実体化した。

「そのことなんだがマスター。バーサーカーのマスターらしき魔術師とプロピールが交戦していて、その中に使い魔もいたと言つていたが」

「あつ、そうね。アーチャー、プロピールさん呼んで、話を聞きたいから」

アーチャーの助言に美奈はそれとポンと手を打ち、プロピールを呼び出すよう指示する。

「了解だ。おいプロピール」

アーチャーが請け負い、虚空に向けて声をかけるとその背後でプロピールが実体化する。

「こいつは俺の使い魔のプロピールだ」

「ご紹介に預かりました、プロピールと申します」

アーチャーが視線と腕を向けてプロピールを紹介すると、それを受けたプロピールはスカートの裾をつまんで優雅にお辞儀をした。

「プロピール、この部屋に来た使い魔はどんなやつだった？」

「気持ち悪いやつでしたね。爬虫類と人間を混ぜたようなやつでした」

アーチャーはプロピールへ首を巡らして、質問を投げかけていく。

「リザードマンみたいなやつか？」

「ちよつと違いますね。強いて言うなら人間の骨格に爬虫類を構成する要素を貼り付けたような感じででしょうか」

「分かった、戻っていいぞ」

問答の末に答えを得たアーチャーはプロピールを魔力に還し、再び正

裕へと向き直った。

「十中八九バーサーカーのマスターが魂喰いをしているな。バーサーカーのマスターらしき魔術師が連れていたという使い魔の特徴がうちのマスターを襲っていた怪物によく似ている」

問答で得た解答をアーチャーが伝えると正裕は少し考え込み、そうして唐突に立ち上がった。

「ありがとう邪魔したな」

そう言つて座ったままの美奈とその後ろで立つアーチャーへ礼を述べると、正裕は部屋の出口へと足を運ぶ。

「え、もう行つちやうんですか？もう少し…」

「悪い、やらなきゃいけない事ができた」

突然に退去しようとする正裕を美奈が引きとめようとするが、正裕はそれを断り玄関へと向かう。

そして靴を履き、ドアを開けて出る寸前で正裕は着いてきていた美奈の方へと向き直り軽く頭を下げた。

「急で済まなかった。今度必ず礼はする」

そうして再度礼を言った後、正裕はドアを開けて美奈の家を出ていった。

「何だったんだろ？」

「さあな」

話についていけず呆然とする主従を残して。

十話 招集

美奈の部屋を訪れて一晩が経った朝、魔力による振動が正裕の耳朶を叩いた。

「教会からの連絡だ」

教会から上げられた魔力信号弾を感知して、正裕は自分が拠点として使っているマンションの一室から協会の方角を眺めた。魔力信号弾は魔術師の連絡手段としては一般的なものであり、魔力を知覚しなければわからない信号弾を上げて魔術師に対して連絡を取るというものだ。信号弾の色や回数によって内容を伝えるものであり、その性質上細かい内容は送れないし特定の個人のみ情報を送るということもできない。しかし、聖杯戦争のような状況下で互いの顔も知らない魔術師への告知手段としては有用であった。

「緊急招集、か」

「どうしたの、マスター」

正裕が信号弾の内容について呟いていると、その脇にキャスターが実体化して正裕に現況を尋ねた。

「ああ、教会からの招集だな。どうやらこちらの言うことを信じたらしい」

美奈の部屋から退出した後、正裕はすぐに聖杯戦争の監督を行っている教会へと使い魔を飛ばした。用件は勿論魂喰いを行っている容疑者についての報告である。そんな状況での緊急招集ともなれば、用件は魂喰いのことであると想像がつく。

正裕は窓から離れ、使い魔を用意するべく精神を集中させた。

街にはいくつかの情報収集用使い魔を放っていたが、その中の一つに教会への移動を指示させる。

直接行けば他の参加者に余計な情報を晒す上に襲われる可能性もある以上、使い魔を代理に送るのが常道であった。

風宮教会。

風宮市の北東にある風切山、その麓に位置する風宮教会は聖堂教会に所属する教会の一つであり、今回の聖杯戦争の監督を任された教会

である。

今その礼拝堂では教会を任された神父が祭壇に立ち、そして魔術師より放たれた使い魔六体信徒席に集まっていた。

聖杯戦争の参加者は七名。使い魔が一体足りない計算である。

（さて、どう考えるべきか）

これまでの間に幾つか小競り合いがあったのは神父も承知している。しかしそこでサーヴァントが脱落したという報告は無く、サーヴァントはまだ7体いるはずである。

そうなると一体足りないのはマスターに使い魔を放つだけの力量がないのか、信号弾を知らないのか、あるいはその両方といったところであろうか。

信号弾を上げてからもう4時間近く経つ。流石にこれ以上開始を延ばしてもはや来るまいと、情報を告知しようとしたところで礼拝堂の扉が開いた。

入ってきたのは一匹の蝙蝠である。どうやらこれで全員揃ったらしいと神父は胸を撫で下ろした。

「さて、全員揃った様だな。ようこそ、風宮教会に。ご足労いただき感謝する。手狭な東屋ではあるが存分にくつろいでいただきたい」

新婦の口から転び出た一見丁寧なそれはその実痛烈な皮肉であった。風宮教会は東屋とは呼ぶべくもないだけの格と規模があつたし、この場に來ているのは皆使い魔であり足を運んだ魔術師など一人もいない。

「さて、これより監督役からの伝達事項を伝える。心して聞いて欲しい」

そう前置きして、神父は本題を切り出した。

「いま、風宮市で意識不明者が幾人も出ている事件は知っているだろうか。あれの下手人が諸君らマスターの一人であるという疑いがある。理由は、まあ魂喰いであろうな。もし、この蛮行を見逃せば聖杯戦争の運行にも支障が出かねないことは魔術師諸君は重々承知しているだろう」

神父はそこで言葉を区切ると、祭壇に置かれた机をばしんと叩い

た。

静まり返った礼拝堂内部が振動が満たす。

「故に教会の監督役として汝らに告げる。魂喰いを行っている者は即刻それを中止せよ。そして、もし魂喰いを行っている者を突き止めそれを討ったマスターには相応の報酬を出すことをここに誓おうではないか。さて話は以上だが質問はないか？」

そう言つて神父は礼拝堂を見回した。そこには使い魔しかおらず、まともに会話できそうな者はいない。

「なまこそうだな、ではここで解散とする」

それを聞いた使い魔たちはあるものは飛び立ち、あるものは床を這うなどして礼拝堂を後にしようとする。しかし、そんな彼らを神父の一言が遮った。

「ああ、そうだ。こちらでも下手人の情報はある程度掴んでいる。魂喰いをやめぬ様なら調査の上こちらでも告知するつもりであるのでそのつもりでいることだ」

十一話 棚ぼた同盟

「くそっ」

冬馬は怒りのあまり部屋の寝台を蹴飛ばした。魔術により強化もなく振るわれた蹴りは、ただ冬馬に痛みをもたらすのみであった。それが彼の苛立ちを益々加速させる。

「くそっ、バーサーカーめ」

そもそも魂喰いをしなければいけなくなったのはバーサーカーが目当てのサーヴァントでなかったことが原因である。しかし、それについて今論じても仕方がない。問題は今後どうするか、すなわち魂喰いをやめるかやめないかである。

ここで魂喰いを止めれば周囲から狙われることもなく聖杯戦争を進められる、しかしそれと引き換えに魔力不足の不安が常につきまとう羽目になるだろう。

どちらを選んでも不利になることには変わりない。

(ならばいつそ…)

この状況を利用する。それが唯一の活路と信じて冬馬はある戦略を選択した。

「流石に信用はしてもらえなかったか」

「まあ証拠は無いからね」

教会での召集が終わった後、正裕はキャスターと話し合っていた。内容は当然先程の召集についてである。

「まあ状況証拠ではないし、敵対関係にあるバーサーカーを陥れるだけでも考えられるしなあ。監督役としては裏付けは取らなきやいけないか」

そう言いながら目の前にある乾きものをつまむ正裕。

酒のあて特有の塩気と旨味を楽しんだ後、お茶を流し込んでそれを洗い流す。酒は飲まない、聖杯戦争が終わるまでは酒は絶つつもりで

あつた。

「しかしアーチャーは本当に芸達者だな。あいつがキャスターでいいんじゃないか本当に」

信号弾の意味についてわからないアーチャー陣営から連絡を貰った後、教会の召集への使い魔を出すと言ったのはアーチャーである。結界の敷設に使い魔の使役まで行う、そんなアーチャーがキャスターでないのが不思議であつた。

対してキャスターの方は陣地作成スキルが陣地踏破なるスキルに変化する上、魔術らしい魔術も使えないキャスターである。正裕がそんな感想を持つのは間違っていないといえる。

「マスターは僕がキャスターなことが不満かい？」

キャスターが笑顔を浮かべつつ正裕に尋ねる。しかし若干その眼が笑っていないかつたが。

「まあ、多少はな。お前だつてじぶんがキャスター向きでないのは分かつてるだろ？」

「う、まあ……」

正裕の指摘に、キャスターが言い淀む。彼自身その適性については理解していたが故に。

「そもそもお前の能力はキャスター相手に有利だからな。そんなお前がキャスターに割り振られても意味がないだろう」

ため息をつく正裕。

キャスターの持つ陣地踏破は相手の工房に攻め入るのに有利な補正を得るスキルである。その上彼の聖剣は魔術や結界を切り払う能力を持ち、更には数多の魔性を退けた逸話を持つ。故にキャスターの用いる魔術に対して優位に立ち、キャスターに使役されることが多い使い魔達に有利で、しかも工房へと攻め込みやすい。

総じてキャスターは魔術師殺しに特化しているのだ。そんな英霊がキャスターに割り振られてしまったこと自体宝の持ち腐れのようなものである。ちなみにセイバーならステータスが上がるし耐魔力が付いてくるであろう。ますますもって魔術師涙目である。まあ陣地踏破のスキルが本来のスキルに戻るため性能が落ちるだろうか。

「まあ今問題なのはお前がキャスターな事じゃなくて、アーチャーがキャスターに似た能力をもっているということだ。同盟相手であるアーチャーがな」

「ん？どういふことだい」

正裕の言葉が腑に落ちず、その意図を尋ねるキャスター。

「いいか、順当に行けば同盟相手とは最終的に戦う事になる。その相手がキャスターに似た能力を持っているんだ。それはお前にとって相性の良い能力ということだ。聖杯戦争の同盟相手としては素晴らしい相手だと思わないか？」

「つまり、アーチャーたちを利用するだけ利用して切り捨てるということかい？」

正裕の言葉にやや不服そうに問うキャスター。

「人聞きの悪いことを言うなよ、別に騙すわけでもない。そもそも聖杯を得るためには全部の陣営を倒さなくちゃいけないんだしな」

「それはそうだけど…」

キャスターは納得がいかないようである。高潔な彼としては正々堂々とした勝利で無いように感じられるのであろう。

「いや、俺も元からそんなつもりは無かったよ。たまたま同盟を組んだ相手と相性が良かっただけだし。そもそも同盟を組んだのだからアーチャーのマスターの為なんだからな」

正裕自身戦力を強化する為だけに同盟を組んだわけではない。本来の目的はアーチャーのマスターを保護し、真つ当に聖杯戦争を行うことである。むしろ素人のマスターを抱えること自体正裕にとつての弱みになりかねない。

「まあそれもそうか」

どうやらキャスターも納得がいったらしく、若干釈然としないような表情ではあるもののその顔からは不満らしきものは感じられなかった。

「ごめん、マスター。変に勘繰って」

頭を下げ、キャスターは正裕へと謝罪する。

「まあ俺も勘繰られても仕方ないことを言ったしな。さて、これから

の事を詰めるためにもアーチャー達と連絡を取るか」
そう言うと正裕は連絡用の使い魔を用意し始めるのであった。

十二話 騎兵捕捉

ばさり、と翼が宙を打つ。

風宮市の上空、濃紺の夜闇の中を一匹の飛竜が飛んでいた。その背には黒い鎧姿の人影があり、また飛竜自体の体色も背に乗せたそれよりもなお暗い黒色であった。

ランサーのサーヴァントとその乗騎である。

ランサーは白兵戦において優れた能力と逸話を残す英霊であるが、飛竜を駆る騎兵として優れた英霊でもある。

宝具になるほどの逸話こそなかったもののスキルとして昇華されたその能力は、サーヴァントとしての彼に飛竜を召喚し使役する能力を与えていた。

彼が行っているのは搜索である。探す対象は2つ。一つは魂喰いの犯人探し、そしてもう一つはライダーのサーヴァントの搜索であった。

前回の戦闘で姿を確認したサーヴァントは彼を除いて四体。セイバー、アーチャー、キャスター、バーサーカーだ。

逆に姿が見えなかったのはアサシンとライダーの二騎。

基本的に姿を確認できないアサシンはしておくとしてライダーだけでも確認したいという考えで、ランサーはライダー搜索に主眼を置くべきだと思っていた。

では何故ライダー探しにこんな上空にいるのか、それはライダーというクラスの特徴が関わってくる。

ライダーとは何かに騎乗しての戦闘を得意とするクラスである。そして伝説や神話において空飛ぶ乗り物というのはそう珍しいものではないのである。

ならばライダーを探すならば上空、そう考えたが為の上空の探索であった。

「当たり前か」

サーヴァントの魔力を確認したランサーはその方向を見やった。微かに都市の明かりに照らされた夜空に目を凝らしてみれば、そこに

は紫紺の羽毛をしたフクロウとそれに掴まれた桃色の何かがあった。

「何だあれは」

戸惑い、目をすがめるランサー。その何かを更に見つめ、そこに桃色の手と赤い足を確認した瞬間ランサーはその正体を確信した。

「カービーか……」

カービー、それはとある惑星に住む異星人の話の主人公である。自分の住む国や星を守ったと言われる彼は、時として様々な乗り物を乗りこなして戦っていたという。ライダーとしては申し分の無い英霊である。そして、その伝説の中には紫色のフクロウなんてものも出てきていた。

(どうするか……)

姿は確認できたが果たして今攻撃するべきかどうか思案するランサー。

幸いライダーがこちらに気付く様子はない。

伝説における彼の能力、そして今回使用されているフクロウの乗騎。それについて思い出しながらランサーは決断した。今が攻めるときであると。

十三話 騎兵激突

ライダーは今日もまた梟に掴まれて空を飛んでいた。理由は風宮市における魂喰い事件の調査のためである。

空を飛べるライダーであるならば、風宮市を一望して犯人の捜索に当たることが出来る。それ故にマスターであるフォリオから犯人の捜索と確保を指示されていた。

「ぽーよー?」

ふと、ライダーの視覚が街を彷徨う異形を捉えた。

街の一角にある比較的大きな公園。街の中にポツリと存在する緑の中に人ではない何かがいる。

もつと近くでそれを見るべくライダーは異形の真上へと移動した。哀れな獲物を待ち伏せてでもいるのか、物陰から動かない異形の人影。

そうして、数分ほどその動向を眺めていたライダーを強烈な殺気が刺し貫いた。

「ぽよっ!」

ライダーの身体を掴んでいた梟が慌ててその場からライダーを引き上げると、数瞬前にライダーがいた空間を黄金に輝く三叉の槍がえぐり穿った。

「ハアッ」

ライダーを強襲したのはランサーであった。黒い甲冑に身を包んだ槍兵は槍を突き出した格好のまま黒い飛竜にまたがって空を飛んでいる。

ランサーはライダーを両断すべく斬り上げによつてライダーを追撃するが、梟は更にその右へと逃げ果せていた。

「ぽよっ!!」

更にライダーはその足で槍の穂先を横から叩きランサーの体勢を大きく乱すと、

「ぽお、よおい!!」

梟から飛び出し、ランサーの頭蓋を蹴り砕くべく回し蹴りを見舞つ

た。

「させるか！」

そのライダーの奇襲を、ランサーは石突を振るって振り払う。

蹴りと薙ぎ払いが激突し、体重の軽いライダーは吹き飛ばされるが、梟が飛び出しその身体をしつかりと掴んで受け止めた。追撃しようにも、ランサーもまた激突の衝撃と無理な反撃で体勢を整えられないでいる。

その結果ライダーはランサーの間合いからのがれ、奇襲によって乱れた体勢を整えることに成功していた。

「まだだっ」

飛竜を駆り、ランサーはライダーを屠らんとすべく再び強襲する。

風宮上空での衝突はまだ始まったばかりであった。

「クソツ、ランサーめ!!」

フオリオは焦っていた。現状の大きな不利に。

ライダー、英霊カービィは宝具『星を呑む者（ホールイーター）』により何かを吸い込んで取り込みむことで取り込んだもの因んだ超常の力、コピー能力を発現させることでこそその真価を発揮する英霊である。

故に、吸い込むものの無い空中ではその能力は大きく損なわれる。

宝具を使って迎撃するという手もあるが、未だ序盤戦である以上宝具の発動は避けるべきであり、またランサーもその隙を与えることのない猛攻でこちらを攻め立ててきている。

「英霊の真名が割れるとこんな厄介になるものか……」

英霊の真名が分かりやすいというのは極めて不利なことである。何故なら英霊の真名がわかってしまえば、得意な戦術やその宝具まで分かってしまうからだ。

そして何分ライダーの正体は非常に分かりやすい。故にこの猛攻もライダーの真名を把握したランサーが、ライダーにコピー能力を使わせないために行っているものであると予想できた。

「いつそ、使うべきか…」

チラリ、とフォリオは己の右腕に目を向ける。

衣服の袖に包まれたその内には、彼の持つ令呪が鈍く輝いていた。

刺突が、斬り上げが、石突による打擲がライダーを打ちのめさんと迫る。

そのことごとくを乗騎を駆って回避しつつ、間隙を縫って反撃を試みるライダー。

しかし武器のリーチと破壊力はランサーに余裕を与え、逆にライダーからは余裕を奪う。

何せライダーはランサーの槍撃を掻い潜らなければならず、死と隣合わせのそれはライダーの精神力を少しずつ削っていく。その反面ランサーは時折ある反撃にさえ気を払えば攻め立てるだけでよいのである。

故にその均衡が破れるのは必然であった。

ランサーの刺突が、ついにライダーを支えていた梟を捉える。翼を穿たれ、苦しげな鳴き声を漏らして消えていく梟。その場に残るのは、紫紺に煌めく羽根のみである。

「ぽよおおおおお」

苦し紛れか、乗騎を失って落下するライダーがランサーを呑み込まんとするよう大きく息を吸い込む。

しかし、そう簡単に飲み込まれるランサーでは無い。

吸い込み始めた当初こそバランスを崩したランサーであるが、すぐさま体勢を整えると吸い込みの勢いを逆用した渾身の一撃をライダーに向けて放つ。

そして赤色が夜空に舞い散った。

十四話 空中戦の行方

赤色が夜空に舞い散った。

しかしそれはライダーの血ではない、そもそもランサーの槍はなんの手応えも無く空を穿ったのだから。

「何!？」

必殺であるはずの一撃をかわされ、狼狽するランサー。

宙を舞う赤。それは何処かから現れた赤色の羽根であった。

では、ライダーはどこに行ったのかと視線を巡らしたランサーに赤い何かが殺到した。

「ちいっ」

槍を振るいそれを弾き飛ばすランサー。弾き飛ばされ夜空に舞うそれもまた、赤い羽根であった。

「まさか」

赤い羽根が飛んできた方向、ランサーがそこに視線を向ければそこには数多の羽飾りがついた異国風の鉢巻を頭に巻き、極彩色の翼をその背に負うライダーの姿。

「これは、コピー能力か……いつの間にこんな物を……!？」

啞然とするランサーであるが、その隙を見逃すライダーではない。

翼を飛ばたかせランサーの周囲を旋回しながら、腕につけた羽飾りを矢の様に放つ。そして、それを避けるすべはランサー達にはない。

いくら竜種とはいえ、相応の体躯を誇りその背に甲冑を着込んだ主を載せているのだ。周囲を囲む様に放たれた飛び道具を避けるのは非常に困難である。

「くっっ」

飛竜を駆り、飛来する羽根が出来る限り少なくなる位置へと移動するランサー。避けきれぬ羽もいくつかあるがそれはランサー自身が槍を振るって打ち払う。

そんなランサーを逃さないと言わんばかりに、羽根を撃ち出しながらランサーを追うライダー。

そんなライダーから逃れるべくランサーは手綱を捌き、槍を振るい

続ける。

しかし、そんなライダーの猛攻は唐突に途切れた。

「む？？」

最後の羽根を切り払った後、気付けばランサーの視界からライダーの姿が消えていた。

気配を探りつつ周囲を睥睨するランサー。

そして彼の感覚がライダーの気配を捉えた時、ライダーはランサーよりも上空に舞い上がっており、

「ぽよおおおおおい!!」

ランサーへと重力と空力を味方に付けた急降下攻撃を仕掛けた。

「ぬうううううう」

その一撃を槍の柄を両手で支えて受け止めるランサー。

その激突と均衡は一瞬であった。

もしランサーがこれを受けたのが地上であるならば、彼はその膂力をもってライダーの突貫を防ぎ切ることができたであろう。だが今のランサーは飛竜の上にまたがり、何も踏みしめるものがない状態である。彼を支える飛竜も低級の飛竜ではない。

「うおおおおおお!!」

結果、墜落は必然であった。

衝撃を支えきることができぬまま飛竜が落下。

ランサーと飛竜はライダーに抑え込まれるままに地表へと向けて落ちていくのであった。

十五話 目標発見

マスター達の呼び出しがあった夜、セイバーのマスターである辰尾勇馬はセイバーとキャスターを偵察に出していた。

目的は魂喰いの下手人の捜索である。

『マスター、奇妙なバケモノがいるがどうする?』

繁華街に送ったセイバーから念話による報告を受け、勇馬は考え込む様に顎へと手をやり、己の使い魔へ問いかける。

『そいつの特徴は?』

『姿は人型だな。大きさは成人男性くらい。もつとも、全身が鱗に包まれているがな』

間をおかず帰ってきた返答に、勇馬は「ほう」と感心したかのよう
に息を漏らす。

『…どうかしたか?』

勇馬の奇妙な反応に違和感を覚えたセイバーが己の主へと尋ねる。

「何、教会からの報告通りの姿だったからな。少し驚いただけだ」

教会に対して匿名で入っていたという報告、そこには魂喰いをして
いるであろう陣営とその使い魔について書かれていた。未確認であ
るが故に先程の会合では告知されなかったそれは、土地の管理者であ
る勇馬にだけは知らされていたのである。

しかし、勇馬はその情報を虚偽によるものと見ていた。

そも聖杯戦争においてすべてのマスターは敵であり、虚偽の報告に
よる妨害など想定してしかるべきだ。

(情報が正確だったのか、それともバーサーカー陣営を陥れるための
工作か…。考えても詮方ないことか)

勇馬は思案し、それが答えが出ない事柄であると結論づけてかぶり
を振る。

「そいつを見張れ、キャスターを合流させるから連携して事に当たる
んだ。分かったな」

情報が正確にしろ、何某かの謀があるにしろその使い魔を見張って
いればなにか掴めるだろう。そう考えた勇馬はセイバーへと指示を

飛ばした。

『いいのか？そうなるとマスターの護りが薄くなるが…』

指示を受けたセイバーはマスターへと問を返した。

現在、キャスターは勇馬の護衛に当たっている。

そのキャスターを使い魔の監視に回せば勇馬を守る者はなく、サーヴァントに襲われれば命を落としてしまう事になるだろう。

「いや、やっつけてくれ」

しかし、勇馬はその進言を却下した。

魔術師の拠点たる工房には様々な魔術的な罫や守護が敷かれており、それはサーヴァントとといえど無抵抗にすり抜けることは出来ない。

ましてや勇馬は風宮に代々居を構える土着の魔術師であり、その邸宅は長い時間をかけて魔術的な要塞と化している。

だが勇馬の決断を最も強く決定づけたのは工房への信頼ではなく、その誇りだ。

辰尾勇馬は風宮の管理者の一族である。

土地の霊脈を管理し、その土地で起きた怪異を律する、神秘を治める魔術師。そういった魔術師は管理者と呼ばれる。

そして、それを継ぐものとして生まれ育った勇馬は土地を荒らすものを許容する訳にはいかなかった。

無辜の人々を襲うバーサーカーへの義憤ではない。この土地を長らく治めてきた管理者の末裔として余所の魔術師に好き勝手をさせてはならない、という使命感。

それが勇馬の決断を後押しした。

『了解した』

セイバーはその決断を尊重し、それ以上の反論はしなかった。

「とうわけだ、頼んだぞキャスター」

勇馬は振り返ることなく己の背後に居るだろう魔術師の英霊へと指示を出す。

「了解だよ、マスター」

了承のみを残して、黒いキャスターの気配はその場より去るので

あつた。